

ラオス・ザンビア農村における生業と社会的ネットワークに関する研究
ー農作物と生活用品のやりとりを中心にー

福島 直樹・原 将也・成澤 徳子



目次

はじめに	1
＜第1部＞ 研究報告	
第1章 ラオス北部における焼畑民の生活用具の保有と貸借ネットワーク(福島 直樹).....	4
第2章 ザンビア北西部における多民族の混住と食料確保にみる社会関係(原 将也).....	14
第3章 ザンビア南部における女性の現金稼得と友人関係の形成 ートンガの友情セレモニーの事例(成澤 徳子)	26
＜第2部＞ 研究集会報告	
研究集会の概要	36
研究集会のプログラム	38
発表要旨	
ラオス北部農村における生活の変容過程(福島 直樹)	40
Changing Processes of Everyday Life in Rural Northern Laos (Naoki FUKUSHIMA)	
ザンビア北西部の多民族農村における生計戦略一端境期における食料の確保に着目 して(原 将也)	42
Livelihood Strategy in the Multi-ethnic Agricultural Community, Northwestern Zambia: Focus on Food Exchange on Off-crop Season (Masaya HARA)	
女性のエージェンシーをめぐってーザンビア南部における個人的友人関係を育む 祝祭の展開を事例に(成澤 徳子)	44
Women's Agency for their Economic and Social Development: A Case Study of the Burgeoning Ceremony for Developing Personal Friendships in Southern Zambia (Noriko NARISAWA)	
おわりに	46

はじめに

私たちはそれぞれ、東南アジアのラオスと南部アフリカのザンビアに暮らす農民の生業研究をすすめるなかで、住民同士の農作物や農具、日用品等の日常的な貸し借りや贈与交換が、自給指向性の強い農耕を主生業とする彼らの生計戦略に深くかかわっていることを明らかにしてきた。このような共同体的ネットワークや互酬性の規範に基づく、家族の再生産の物質的基盤としての生存維持の重要性については、東南アジア農村を舞台とした J. スコットのモラル・エコノミー論やアフリカ農村の文脈で構想された G. ハイデンの情の経済論を皮切りに、多くの先行研究によって指摘されてきた。一方で、現代アジア・アフリカの流動的な農村の社会状況では、人びとの経済行動における伝統的社会関係を過度に本質化するのではなく、彼らの日々の暮らしの安定と成功が、既存の社会関係をも超えた様ざまな社会的ネットワークの形成や維持にかかっている点に着目する必要がある。

福島が調査するラオス北部の僻村に暮らす少数民族モンの人びとは、焼畑移動耕作と政府による低地への移住政策により村落の離合集散を繰り返してきた。そこでは、自給作物生産を失敗した世帯が食糧を賄う際に、先行研究で指摘される従来のクラン内結束を超えた社会関係が重要なファクターとなってきた。一方で、原が調査するザンビア北西部の農村は、焼畑農耕民カオンデの土地であり、他の民族領域や鉱山都市から移住してきた出自の異なる人びとが混住している。そこでは、民族間の生業形態の差異が地区内における生業の多様性を生み出し、食糧や労働の交換に、教会の同宗派の友人関係などがクランや民族のつながりを超えて用いられている。他方、ザンビア南部で調査する成澤は、農耕民トンガの女性の間で近年みられる、贈り物の贈与と食事による歓待を繰り返す祝祭の創出とそれによる新たな友人関係の形成について、女性の贈答慣行が主役となった、生活の保障や潤いを他者との関係性のなかで見出していく営みとして注目している。

私たちは、現代アジア・アフリカ農村に暮らす人びとが、いかにして新たな社会関係を形成し、たゆまぬ他者との相互交渉のなかでそれを維持・変容させ、変化のなかに活路を見出しているのかに関して、ミクロな視点による研究成果を持ち寄り、地域を超えた共通性を見出すことを目指してきた。その成果を現地の研究機関で発表し議論を深めることで、出自やジェンダーなどの差異を超えた住民の共生を基盤とした農村発展に関して有効な視座を提供することが期待できると考え、ラオスとザンビアの両国で研究集会を主催した。本報告書はその成果をまとめたものである。

〈研究メンバー〉

福島 直樹（ふくしま なおき）

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程
（グローバル地域研究専攻、持続型生存基盤論講座）

専門分野：アジア地域研究、人間生態学

原 将也（はら まさや）

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程
（アフリカ地域研究専攻、民族共生論講座）

日本学術振興会特別研究員 DC1

専門分野：アフリカ地域研究、人文地理学

成澤 徳子（なりさわ のりこ）

所属：京都大学東南アジア研究所（社会文化相関研究部門）

日本学術振興会特別研究員 PD

専門分野：アフリカ地域研究、人類学、ジェンダー研究



ラオスの農村にて（写真左から、福島、福島の前友 Bounlord 氏、成澤、原）

＜第 1 部＞ 研究報告

第1章 ラオス北部における焼畑民の生活用具の保有と貸借ネットワーク

福島 直樹

1. はじめに

主に国連や途上国政府は、社会の発展の程度を示す指標の一つとして人間開発を用いてきた。生産性や一人あたり所得、また教育や医療へのアクセスのしやすさによって生活水準を測り増進することを志向してきた。しかし、地球規模の自然環境問題やエネルギー問題の議論の進展により、開発や発展の持続性を考慮しなければならないことが指摘されるようになった。生存基盤研究では「生存基盤」を、個人や地域社会が自己を維持するために必要な物質的・精神的諸条件と定義し、生存圏という新たな分析枠組みを用いて、生産性に偏重した従来型の価値観からの脱却を目指している*。

本報告は、この生存基盤研究を支持し、具体的な事例から検討するものである。生産性や所得を向上させるための研究ではなく、生活を持続させるための研究である。生活の維持を検討するに当たり生活用具に着目した。近年、農村にも既製品が急速に流入しており、この既製品の登場が農村の生活に変化をもたらす大きな要因の一つになっている。

そこで本研究ではまず、農民がどのような生活用具を保有することで生活を成り立たせているかを調べた。次に、生活用具の保有に世帯間の格差があるか。その格差は、どのようにして生じるかを調べ、最後に、生活用具の不足を補う際に有効に機能しているネットワークを分析した。

調査の方法として、生活用具の測量と聞き取りを行なった。測量では、生活用具の種類と数、サイズ、重さ、色、素材を調べた。聞き取り調査では、自家製か既製品か、入手経路（購入・譲渡・相続・貸借）、値段、使用期間、用途について調べた。

2. 調査地の概要

調査地のラオスは、人口比で 25-35% が栄養不足とされる国である**。国連の WFP 世



図1. 調査地の位置 出所：1994 Encyclopaedia

* 杉原薫・河野泰之ら. 2012. 『講座 生存基盤論 全6巻』 京都大学学術出版会

** WFP. 2012. 「世界の飢餓状況 2012」 United Nations World Food Programme

界食糧計画が公表した「Hunger Map2012」では、タジキスタン・北朝鮮に並び、アジアで飢餓的状况にある国のワースト3に数えられている。近年、農村における変化が大きいことが指摘される地域の一つでもある。

調査集落は、首都ビエンチャンからアクセスするのに最も時間を要する県庁所在地を選び、さらにこの県庁から最も遠い郡役場、さらに郡役場から最も遠い村を選定の基準として、9つの集落から1集落を選んだ。この選定は、中央政府と農業の市場経済化の影響を最小化することを意図している。ラオスは東南アジア諸国のなかでは唯一の内陸国で、周囲を中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーの5か国に囲まれている。調査地のフアパン県は、ベトナムの国境と接している（図1）。



写真1．集落の景観（2012年、筆者撮影）

調査は、2012年7月から9月まで行った。調査を行った集落は、ラオスとベトナムの国境を南北に走るアンナン山脈の北部に位置しており、山の中腹にある（写真1）。南側斜面の標高1010mから1060mに家屋が密集し、ひとかたまりの集落を形成している。4kmほど西に位置する隣の集落と合わせて、2集落で1行政村とされている。

集落の設立は約30年前の1982年で、民族は父系リネージのモン（Hmong）である。31世帯、5氏族からなる集落である。人口は2012年9月の調査時点で188人だった。集落内に市場はなく、最寄りの市場までは徒歩で1日、バイクで3時間かかる。雨季には、川の増水により、街へのアクセスは非常に困難になる。

調査集落の人口の内訳は、男性90人に対して女性98人で、女性の割合がやや高い。人口を年齢階層別にみると、0歳から9歳の人口が全体の3分の1を占めた。この9歳までの階層で男児より女児が多いことから、集落全体でも女性の割合が高い結果になっている。なぜ男児が少ないかの理由は、よくわからなかった。

集落内の労働力人口は93人で、全体の約半分だった。一方、非労働力は95人で、その内訳は、10歳未満の子どもが69人（73%）と最も多く、次いで街で就学中の子どもが13人（14%）、高齢者8人（8%）等だった。

3. 生活用具の分類

生活用具とは「住宅内に持ち込まれている物のうち、耐久消費財を中心とする、日常の生活行為に深く関わりをもつ物」〔鳥飼1984〕とされ、本稿においても基本的に、この定義を踏襲する。

* 労働力の算定に当たっては、世帯ごとに実質的に労働を担っている人を割り出した。集落内に聴覚障害者が2人いるが、畑仕事を手伝っている実態があることから、労働力として数えた。子育てを終えて子どもに扶養されている者は、年齢に関わりなく高齢者として分類した。高齢であっても、家族の扶養のために労働を担っている者は、高齢者とせずに、労働力人口に数えた。



写真2. 居間の生活用具 (2012年、筆者撮影)



写真3. 台所の生活用具 (2012年、筆者撮影)

集落内で実際に確認できた物のうち、衣類と寝具を除く全ての生活用具を調査し、用途別に分類した。本研究では大分類5、中分類20に分類した。この分類は、商品科学研究所とCDI(Communication Design Institute)が開発した分類法を参考にし、調査地の実情に合わせて改変して用いた。

調査の結果、集落内全体で137品目、2,488点の生活用具を確認した(写真2、写真3)。生活用具を用途別に分類すると、食に関わる物64品目、住居に関わる物24品目、健康15品目、生業30品目、社会・娯楽33品目になった(表1、表2)。

表1. 生活用具の用途別分類(1)

大分類	中分類	品目名	品目数
食	台所用品	調理用の鍋、鍋のフタ、バケツ、炊飯用の鍋、五徳(ごとく)、まな板、手桶、タライ、タンク、炊飯用蒸し器、ナタ、お玉、やかん、包丁、平ざる、すり鉢、すり棒、背負いかご、甕(かめ)、炉棚・天棚・火棚、ボールざる、ナイフキャップ、タワシ、精米機、調理台/物置台、落としフタ、ベータオカオ、バケツ担ぎ棒、ねずみ取り、洗剤(食器洗い用)、磨ぎ石、足踏み式精米機、すりおろし器、食器調味料の棚、鍋持ち用フキン、串焼き用の鉄棒、薪担ぎ用しよい子、野菜用蒸し器、豚の脂入れ竹、円錐ざる、空きビン、大型の米びつ、かきまぜ棒、(油入れ)粉ミルク缶、大型回転式臼、手動式臼ときね、トウモロコシつぶとり器	計64品目
	テーブルウェア	ちゃぶ台、お椀、スプーン、お玉、皿、御櫃(おひつ)、コップ、給水ポット、はし	
	食料品・調味料	旨味調味料、塩、調理用の油、魚醤、チリソース、カピ、はちみつ、酒造る粉末	
住	家具・居間	五徳(ごとく)、椅子、ござ、ベッド、炉棚・天棚・火棚、ほうき、ちりとり、トタン屋根、階段はしご棒、衣料品収納かご、ソファ用いす、座布団、大型の戸棚、藤製のいす、くず入れ用かご	計24品目
	燃料・光熱源	背負いかご、電球、自家発電機、懐中電灯、自家発電機の部品、薪担ぎ用しよい子、延長コード、油搾り器、アルコールランプ	

* 集落内全体の品目数と用途別の品目数の合計とが一致しないのは、複数の用途を具える生活用具があるという実態を考慮したためである。1つの生活用具でありながら複数の用途を持つ場合には、品目を重複させた。たとえば、バケツは、食に関連する生活用具であると同時に、健康に関する生活用具として洗面や水浴びの際に用いられるほか、生業分野でも用いられていることから、3つの分野で使用される生活用具とした。

表2. 生活用具の用途別分類 (2)

大分類	中分類	品目名	品目数
健康	洗濯・縫製 バス・トイレ	バケツ、洗剤(洗濯用)、洗濯用ブラシ、足踏みミシン バケツ、手桶、洗面用具のかご、歯ブラシ、歯磨き 粉、くし、軽石、シャンプー	計15品目
	美容・医療	くすり、かがみ、整髪料ジェル	
生業	狩猟	弓、矢、銃、矢のケース、鳥捕獲用の網、トリ打ち用 パチンコ	計30品目
	採集	バケツ、背負いかご、手提げかご(野菜など)、薪担ぎ 用しよい子、かごひも、カエル用カゴ	
	木材伐採	チェーンソー、チェーンソーの部品	
	栽培	農薬散布機、鍬(くわ)、種、シアム、鎌、シャベル、 農薬缶	
	外仕事用装備・携行品	ナタ、傘、水筒、弁当用コメ入れ	
	飼育	ナタ、飼料用おろし金、まな板(飼料用)、トウモロコシ つぶとり器	
社会・娯楽	その他	稲穂打ち棒	計33品目
	交通・通信	携帯電話、オートバイ、固定電話、自転車、空気入れ	
	趣味・芸術	アヘン吸引用具、ラジオ、テレビ、VCD再生機、水タ バコ(筒)、スピーカー、パラボラアンテナ、楽器ケー ン、MP3、油搾り器、アルコールランプ	
	工具	ナタ、ノミ、かなづち、ふいご(製鉄用)、鉄の棒で尖 形、オノ、くぎ	
	おもちゃ・ペット	トリのエサ、写真、水中メガネ、ニワトリの足、イノシシ のあごの骨	
	儀礼・宗教	神棚、儀礼用品、長椅子、銃、吉凶時刻表	

素材として多く使われていたのは金属、木材、プラスチックだった。使用期間では、2年間がもっとも多く、次いで1年間、1年以内と続き、ここ1～2年のあいだに入手された生活用具が、全体で大きな割合を占めた。入手経路を調べたところ、品目数では自家製品と購入品との割合がほぼ半々となり、拮抗していることが分かった。また、もともと自分の物ではない譲渡・相続品や借用品が、全体で4分の1程度保有されていた。

生活用具は、その素材・形状・用途・入手先を変化させていることもわかった(図2)。たとえば、囲炉裏に鍋を置く際に使われる生活用具に五徳がある。現在、集落で確認できる天然素材の石の使用は稀で、金属製が主流になっており、自家製だったものが既製品に移行中である。また、ちゃぶ台は木製が金属製に、自家製が既製品に移行中である。生活用具が形状を変えずに、用途が変わる例もみられた。たとえば、甕は水を保管するために用いられた生活用具だったが、現在ではタケノコの漬物を漬けるための生活用具になっている。これはプラスチック製のタンクやバケツが登場し、水を保管するために甕が使われなくなったためと考えられる。

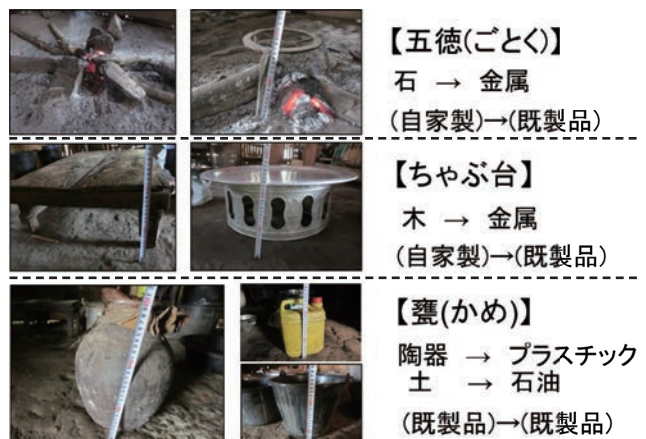


図2. 生活用具の素材・調達方法の変化と機能分化

4. 世帯別状況

全 31 世帯を 3 つの階層に分類した。3 つの階層とは、集落内で保有される生活用具の品目数が相対的に少ない世帯（14 世帯）、中間世帯（10 世帯）、多い世帯（7 世帯）の 3 階層である（図 3）。各階層の世帯特性を概観した上で、生活用具保有の特徴について以下にみていきたい。

生活用具の品目数からみた平均的な世帯を 50 とした場合に、それぞれの世帯がどのような生活用具をどれくらい保有しているかを調べた。その結果、生活用具の少ない世帯で、全般的に物が無いということではなく、ある特定の分野では多くの生活用具を保有するような世帯もみられた。一方、品目数を多く保有する世帯では、5 つの分野で比較的に偏りなく生活用具を保有する傾向がみられた。

集落の世帯人員の平均は、1 世帯 6 人だった。最小 2 人世帯から最大 13 人世帯までばらつきがあっ

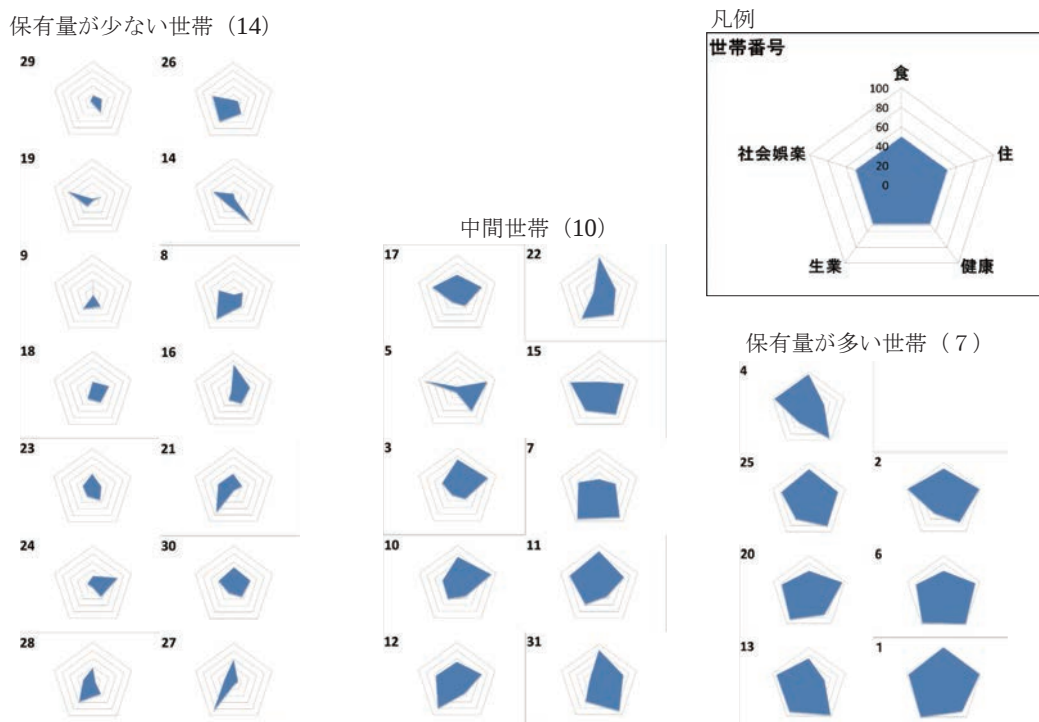


図 3. 世帯別分野別の保有品目数比較

た。これを生活用具の保有との関係でみると、必ずしも世帯の人員規模が生活用具の保有品目数を決定しないことが分かった。9 人を超す大家族世帯でも、生活用具の保有が少ないケースもあれば、3 人程度の小規模な世帯であっても生活用具の保有が多いケースもあった。

世帯ごとの移住歴と分家歴とを調べた。はじめに移住歴では、集落内に保管された納税記録と聞き取り調査から、過去 10 年間で世帯数が 3 倍に増加したことがわかった。この間に増加した世帯について詳しく見ると、転入によって増えた世帯（社会増）が 11 世帯、世帯分けして増えた世帯（自然増）が 11 世帯あった。移住が多いとされる焼畑民だが、定住的な生活を送る世帯が 9 世帯あることがわかった。また、集落長への聞き取り調査から、過去 2 年間に、他集落に転出した世帯が 4 世帯あった。生活用具の保有との関係でみると、同集落内に定住的な世帯と他集落から移住してきた世帯との間に

特段の傾向はみられなかった。次に分家歴では、世帯分けした際に両親と同居するタイプの世帯を本家、両親から独立して居住するタイプの世帯を分家とした。この分家歴と生活用具との関係をみると、本家に比べて分家世帯で生活用具の保有が少なかった。

世帯人員の構成から全世帯を4つのタイプに分類した。その結果、核家族タイプの世帯が23世帯と最も多く、全体の3分の2を占めた。核家族をさらにⅠ型とⅡ型の2つのタイプに分類した。Ⅰ型は子どもが労働力としてまだまったく期待できない世帯、Ⅱ型は子どもの一部が労働力として期待できる年齢に達している世帯とした。Ⅰ型が13世帯、Ⅱ型が10世帯だった。Ⅲ型は3世代同居タイプで5世帯、Ⅳ型はその他のタイプで3世帯だった（表3）。数の上ではⅠ型とⅡ型を合わせた核家族23世帯が主流のようにみえるが、筆者がフィールドで受けた印象としてはⅢ型タイプの5世帯が集落の中心的存在であり、核家族世帯はその周囲を取りまいているように見えた。これを生活用具の保有との関係でみると家族周期がⅠ型からⅡ型に移行する過程で生活用具が増加していた。またⅠ型とⅢ型とを比較すると、型内に占める生活用具の多い世帯の割合がほぼ等しく、また生活用具が少ない世帯の割合もほぼ等しかった。

表3. 世帯タイプ別世帯数

	世帯タイプ	家族構成	世帯数	合計
Ⅰ 型	核家族 (子どもが労働力にならない)	両親・子ども	9	13
		片親・子ども	2	
		夫婦のみ	1	
		両親・子ども・居候(父の叔父)	1	
Ⅱ 型	核家族 (一部の子どもが労働力)	両親・子ども	10	10
Ⅲ 型	3世代が同居する世帯	両親・子ども・祖母	2	5
		両親・子ども・祖父母	1	
		両親・子ども・祖父母・父の弟妹	1	
		両親・子ども・祖父・父の弟妹	1	
Ⅳ 型	その他のタイプ	両親・子ども・祖父母・父の兄弟妹・父の姉・父の姉の子	1	3
		両親・子ども・居候(父の叔父夫婦)・居候の子(父の叔父の子)	1	
		兄弟・祖母・父の妹	1	

31

この集落には5つのクランが混住する。クラン別に世帯数を見るとヤー氏が18世帯で最大グループだった。チャ氏は1世帯だけだった。これを生活用具の保有との関係でみると、生活用具の少ない世帯群をヤー氏とリー氏がほぼ独占した。ヤー氏18世帯のうち半数を超える世帯は、生活用具の少ないグループに属していた。集落内最大グループのヤー氏が生活用具の保有品目数でみると有利な状況にあるわけではないことがわかった。

世帯特性と生活用具の保有の関係を考察するために、2012年の穀類の作付け状況を調べた（図4）。主食のコメについては、全世帯が作付けをしていた。主に家畜飼料用のトウモロコシとキャッサバでは、作付けする世帯と作付けしない世帯とに分かれた。主食のコメの収支状況に

ついて詳しくみると、集落全体では収入として約54トンの収穫があったのに対して、支出として24トンのコメが消費されていた。これを差し引きすると余剰米が30トンあった。これは31世帯が1年間に消費するコメの総量以上に当たる。集落全体としては余剰米があるものの、その一方でコメ不

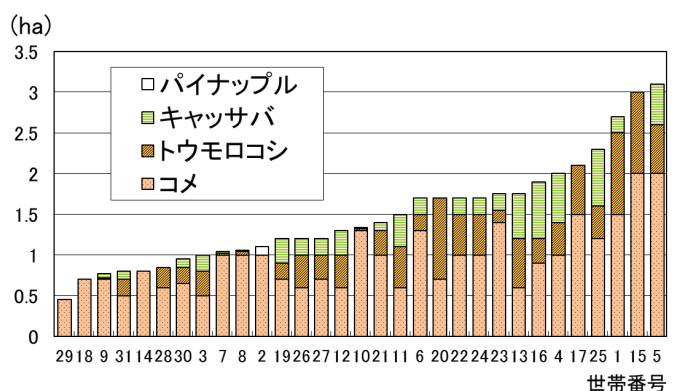


図4. 世帯別穀物作付け面積

足世帯が 11 世帯あった。これを生活用具との関係でみると、コメ収支が悪い世帯ほど、生活用具の保有が少なかった。

次に、家畜について調べた（図 5）。主な家畜はブタと家禽類だった。ほかに牛、水牛、ヤギを飼う世帯もあったが、家畜をまったく飼っていない世帯が 7 世帯ある一方で、世帯のなかには大型家畜を 10 頭以上保有する世帯もあり、世帯間に差が見られた。これを生活用具との関係でみると、家畜が少ない世帯ほど、生活用具の保有が少なかった。

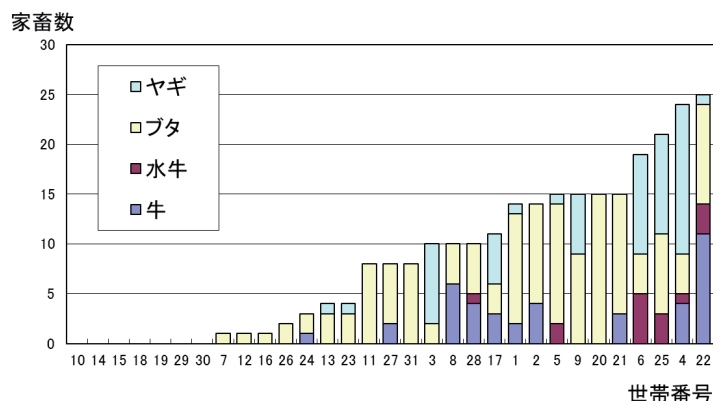


図 5. 世帯別家畜保有頭数

世帯特性と生活用具の保有の関係をまとめると次のような結果になった。一、世帯の人員規模の大小で生活用具の保有量に差はなく、また定住的世帯か転入世帯かの違いによる生活用具の保有量についても差がみられなかった。二、本家よりも分家の生活用具が少なかった。三、世帯タイプ I 型から II 型に掛けて増加した。四、クランでは最大グループが生活用具の保有に優位に働くわけではなかった。五、コメ収支が悪い世帯と、家畜が少ない世帯で生活用具の保有が少なかった。

5. 集落内ネットワーク

生活用具の不足を補う際に有効に機能しているネットワークを調べるために、貸し借りのネットワークを分析する。調査時に他世帯から借りて保有されていた生活用具にどのようなものが多かったかを調べたところ、希少性が高い生活用具が貸し出されているわけではなかった。今回の調査結果では、世帯保有率が高く、個体数も多い物が貸し出されていた。つまり、どの世帯にもあるような物が貸し出されていた。

貸し借りが行なわれた理由について尋ねたところ、冠婚葬祭など世帯ごとに行なわれる儀礼の際に、来客用として補充される借用品や、新婚世帯の生活用具不足をサポートするために貸し出される借用品が多かった。

貸し借りした人をクランでみると、同じクラン内だけでなく、異なるクラン間でも貸し借りが行なわれていた（図 6）。従来からモン（Hmong）はクラン内の紐帯が強いと言われているが、実際には異なるクラン間での貸し借りがみられた。この異なるクラン間の貸し借りの事例は、血縁を利用する事例（夫からみて妻方の姻戚や娘夫婦との間での貸し借り）に限られていた。そこで世帯間のつながりについて血縁関係のみで示した（図 7）。これをみると、生活用具の貸し借りの大半が 1 親等から 4 親等までの血縁を利用して行なわれていることがわかった。

* 生活用具の貸し借り調査では、テレビ、大型の石うす、精米機など持ち運びが困難なものを除いた。これらの生活用具については複数の世帯間で共有されているような実態がみられるが、物が移動しないために共有の度合いの把握が不明瞭で、貸し借りがあったかどうかの判断が困難だったからである。

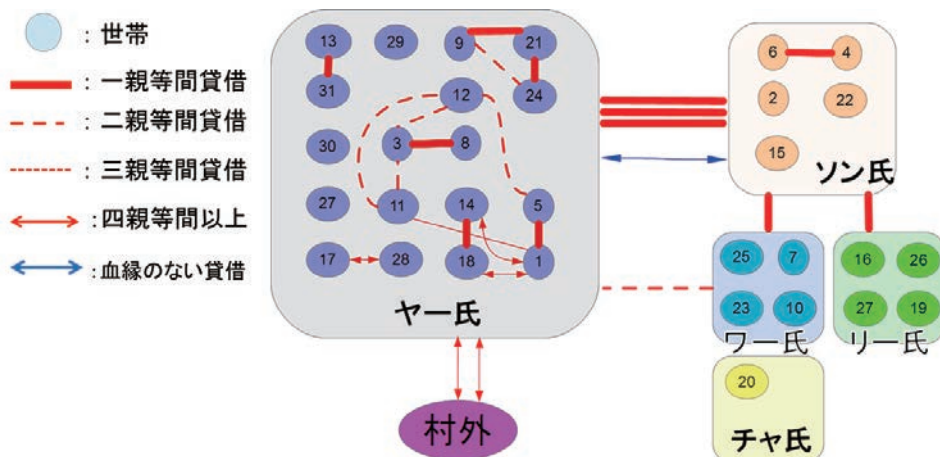


図 6. クラン別貸借関係

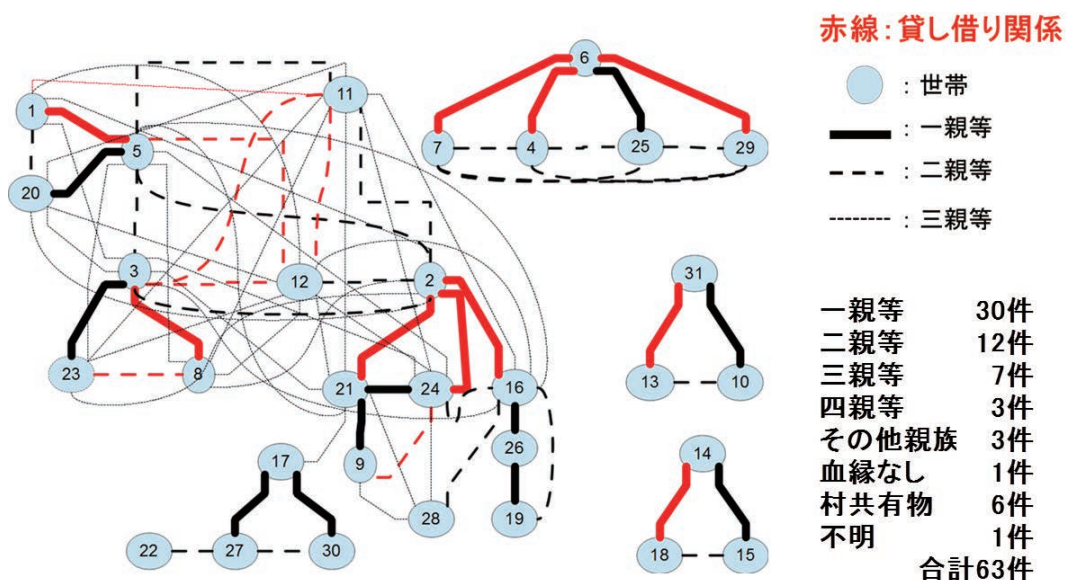


図 7. 血縁関係別貸借関係

6. おわりに

調査した集落で生活を維持するために必要なものは、生活用具が不足した際に借りてこられる人的ネットワークを維持することにあると言える(写真4)。この人的ネットワークは、クランよりもむしろ姻戚を含む血縁関係が有効に機能していた。

調査の結果からわかったことをまとめると、1) 集落には 137 品目 2,488 点の生活用具が存在し、2) 生活用具の保有では、世帯間に格差があった。これらの格差は、主に分家歴や家族周期、クランの違い、コメ収支、家畜の保有頭数により強い影響を受けていた。また、3) 生活用具の不足を補う際には、血縁関係が利用されていた。血縁のない世帯間での生活用具の貸し借りは稀だった。血縁のない世帯

間での生活用具の貸し借りは稀だった。



写真 4. 大型の石うす (2012 年、筆者撮影)

参考文献

- Csikszentmihalyi, M and E. Rochberg-Halton. 1981. *The Meaning of Things: Domestic Symbols and the Self*. Cambridge: Cambridge Univ Press.
- Mertz, O., C. Padoch, J. Fox, R. A. Cramb, S. J. Leisz, N. T. Lam and T. D. Vien. 2009. Swidden Changes in Southeast Asia: Understanding Causes and Consequences, *Human Ecology* 37: 259-264.
- Rerkasem, K., D. Lawrence, C. Padoch, D. Schmidt-Vogt, A. D. Aiegler and T. B. Bruun. 2009. Consequences of Swidden Transitions for Crop and Fallow Biodiversity in Southeast Asia. *Human Ecology* 37: 347-360.
- 朝倉敏夫・佐藤浩司. 2002. 『2002 年ソウルスタイル李さん一家の素顔の暮らし』国立民族学博物館.
- カトーナ, G. 1964. 『消費者行動—その経済心理学的研究』社会行動研究所訳, 南博監修, ダイアモンド社.
- 北浦かほる・辻野増枝. 2002. 『台所空間学事典—女性たちが手にしてきた台所とそのゆくえ』彰国社.
- 小池三枝・柴田美恵. 2002. 『日本生活文化史—近現代の移り変り』光生館.
- 今和次郎. 1971. 『考現学』ドメス出版.
- 商品科学研究所・CDI. 1980. 『生活財生態学—現代家庭のモノとひと』リプロポート.
- 商品科学研究所・CDI. 1983. 『生活財生態学 II—モノからみたライフスタイル・世代差と時代変化』リプロポート.
- 商品科学研究所・CDI. 1993. 『生活財生態学 III—大都市・地方都市・農村・漁村「豊かな生活」へのリストラ』リプロポート.
- 杉原 薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生. 2012. 『講座 生存基盤論 第 1 巻 歴史のなかの熱帯生存圏—温帯パラダイムを超えて』京都大学学術出版会.
- 鳥飼香代子. 1984. 「すまい方の工夫—ゆったり住む」『放送 (テレビ) による熊本大学公開講座』熊本大学学生部, 第 1984 巻, pp. 61-74.

- 中島喜代子・一棟宏子・沖田富美子・塩谷壽翁・上林博雄. 1987. 「生活観的要因を考慮した場合の生活用品保有に影響を与える諸要因」『日本建築学会計画系論文報告集』社団法人日本建築学会, 第 371 巻, pp. 68-80.
- マテリアルワールドプロジェクト. 1994. 『地球家族—世界 30 か国のふつうの暮らし』近藤真理・杉山良男訳, TOTO 出版.
- 峯陽一. 2012. 「生存基盤」『講座生存基盤論 第 6 巻 持続型生存基盤論ハンドブック』京都大学出版会, pp. 138-143.
- 宮本基杖. 2010. 「熱帯における森林減少の原因—焼畑・人口増加・貧困・道路建設の再考」『日本森林学会誌』92(4): 226-234.
- 柳澤雅之・河野泰之・甲山治・神崎 護. 2012. 『講座 生存基盤論 第 2 巻 地球圏・生命圏の潜在力—熱帯地域社会の生存基盤』京都大学学術出版会.

参考 URL

- WFP. 2012. 「世界の飢餓状況 2012」United Nations World Food Programme. 〈<http://www.wfp.org/>〉(2013 年 5 月 31 日閲覧)
- 総務省統計局. 1990. 「日本標準商品分類 (平成 2 年 6 月改定) の意義」総務省ホームページ. 〈<http://www.stat.go.jp/index/seido/syohuin/gaiyou.htm>〉(2013 年 5 月 31 日閲覧)

第2章 ザンビア北西部における多民族の混住と食料確保に みる社会関係

原 将也

1. はじめに

植民地時代のイギリス領では間接統治がなされ、各地域の伝統的首長に統治の権限が委ねられていた。ザンビア（当時の北ローデシア）においても同様であり、民族ごとに存在していた伝統的首長が、当該地域における行政や司法を実質的に担っていた。そのしくみは現在でも踏襲されており、統治機構が近代的制度と伝統的制度の二重構造になっている [Mamdani 1996; Logan 2009]。つまり県知事といった行政機関のほかに、伝統的首長がいまだに地域における土地の割り当てや争いの調停といった権限を実質的に保持しているのである。地域ごとに伝統的首長がおり、現在でも Murdock [1959] が分類したように、ある程度民族ごとにまとまるように暮らしている。多民族が暮らすザンビアであるが、ひとつの村のなかでは、ひとつの言語が話されていることが多く [Kashoki and Mann 1978]、民族ごとに村が形成されるのが一般的である。

一方で植民地統治やグローバル化の高まり、生態環境の変化などの要因によって、アフリカ各地で人びとが流動的に移動してきたことも事実である。とくに 20 世紀以降、人びとがより活発に移動するようになり、アフリカの都市には多くの出稼ぎ民が農村から流入し、さまざまな民族の人びとが混住するようになった [松田 1995]。このような経済や国家政策の動きによる都市の流動性の高まりは、農村の民族構成にも影響をおよぼし、多民族構成の農村もみられるようになった [島田 2007]。

本研究では都市化が進行しているザンビアにおいて、ひとつの農村に居住している人びとの流動的な動きをとらえ、多様な人びとが移住したことで形成された多民族が混住する農村社会における社会関係について検討することを目的とする。さまざまな経緯から現在ではひとつの農村に居住している人びとが築く社会関係に着目し、とくに食料の確保という観点から、それぞれがどのようなつながりをたよって生活を維持しているのかを検討する。

2. ザンビアの社会情勢と農業政策の変化

農村に暮らす人びとの生活をみる前に、人びとの生活に深くかかわっているザンビアの社会情勢について概観していこう。とくにザンビアの主力産業である鉱業と国民の大多数が従事する農業について、政府と国民の動きをとらえていきたい。

20 世紀に入ってからザンビアの社会情勢は、世界経済の動きと連動して、めまぐるしく変化した。1900 年代には北ローデシア（現在のザンビア）では、南ローデシア（現在のジンバブウェ）の大規模農場や南アフリカ共和国の鉱山へ出稼ぎに行く人びとが多かった。1920 年代に入ると、北ローデシア国内でも銅鉱山が次々と発見され、操業されはじめたため、人びとは国内で働くようになった。銅鉱山が発展すると、都市居住者の人口が増加し、それにとまって都市の食料需要は高まった。この需要を満たすため、鉄道沿線地帯である現在の南部州を中心に、トウモロコシが大規模に栽培さ

れはじめた。このころからザンビアでは、トウモロコシを中心とした農業部門の発達がはじまった [Lukanty and Wood 1990]。

1964 年の独立以降、1970 年代前半までは、都市の仕事への期待感によって人びとが農村から都市へと移住し、都市人口は急増した [小倉 1995]。都市部への安定した食料の供給を実現するため、政府は 1969 年に政府機関であるナムボード (NAMBOARD : National Agricultural Marketing Board) を設立し、農産物の買い付け価格と農家への投入財 (化学肥料) の売り渡し価格を国内均一にし、輸送費の地域間の格差を解消しようとした [児玉谷 1995]。このような政府による補助金のおかげで、農家が市場価格よりも安価に化学肥料を購入でき、輸送費を負担しなくてすむため、遠隔地においてもトウモロコシ栽培が活発化した。

首都ルサカから約 800km も離れた北西部州ムフンブウェ県周辺の農村でも、1978 年には化学肥料の供給が開始され、トウモロコシの栽培と政府機関によるトウモロコシの買い付けがはじまった。ムフンブウェ県周辺の農村では、1978 年から 1986 年まで化学肥料の供給とトウモロコシの買い付けが実施されていた。トウモロコシが現金収入になるということで、それまでは自給目的のモロコシを焼畑で栽培していたカオンデの人びとに、化学肥料を用いたトウモロコシ栽培が普及していった [大山 2011]。

1973 年のオイルショックにともなって世界市場における銅の取引価格が暴落し、ザンビアは経済危機におちいった。1985 年には、世界銀行と IMF 主導の構造調整プログラムが実施され、政府は貿易の自由化やトウモロコシをはじめとした農産物の価格統制の解除といった経済自由化への施策を実施した。しかしトウモロコシの国内均一価格は、1991 年の政権交代までつづいた。1991 年以降には急速に経済自由化が進行し、各種補助金の撤廃や国営企業の民営化などが推し進められた。

1995 年には食糧備蓄法が成立し、政府がトウモロコシと化学肥料の流通を独占する根拠がなくなり、新たな政府機関として食糧備蓄庁が創設された [児玉谷 2003]。しかし 2002 年には、食糧備蓄庁がトウモロコシをはじめとした食料の備蓄という本来の業務とは異なる化学肥料の購入に対する補助金や、国内均一価格によるトウモロコシの買い付けを再開している [Kodamaya 2011]。これらのプログラムは、2013 年現在でもつづいており、北西部州のような遠隔地に暮らす人びとにとって、貴重な現金収入源となっている (写真 1)。

3. 調査地の概要

本研究の調査地は、ザンビア北西部州ムフンブウェ県シュークウェ西地区 (以下 S 地区) である (図 1)。もっとも近い町である県都ムフンブウェからは、約 15km であり、日帰りで往復することができる。S 地区は、焼畑農耕民カオンデの伝統的首長であるチーフ・チゼラの領域に属する。ムフンブウェ県の人口密度は 2.8 人 /km² であ



写真 1 食糧備蓄庁の集荷拠点へのトウモロコシの出荷：多くの人びとは、トウモロコシを出荷することで現金収入を得ている (筆者撮影)。

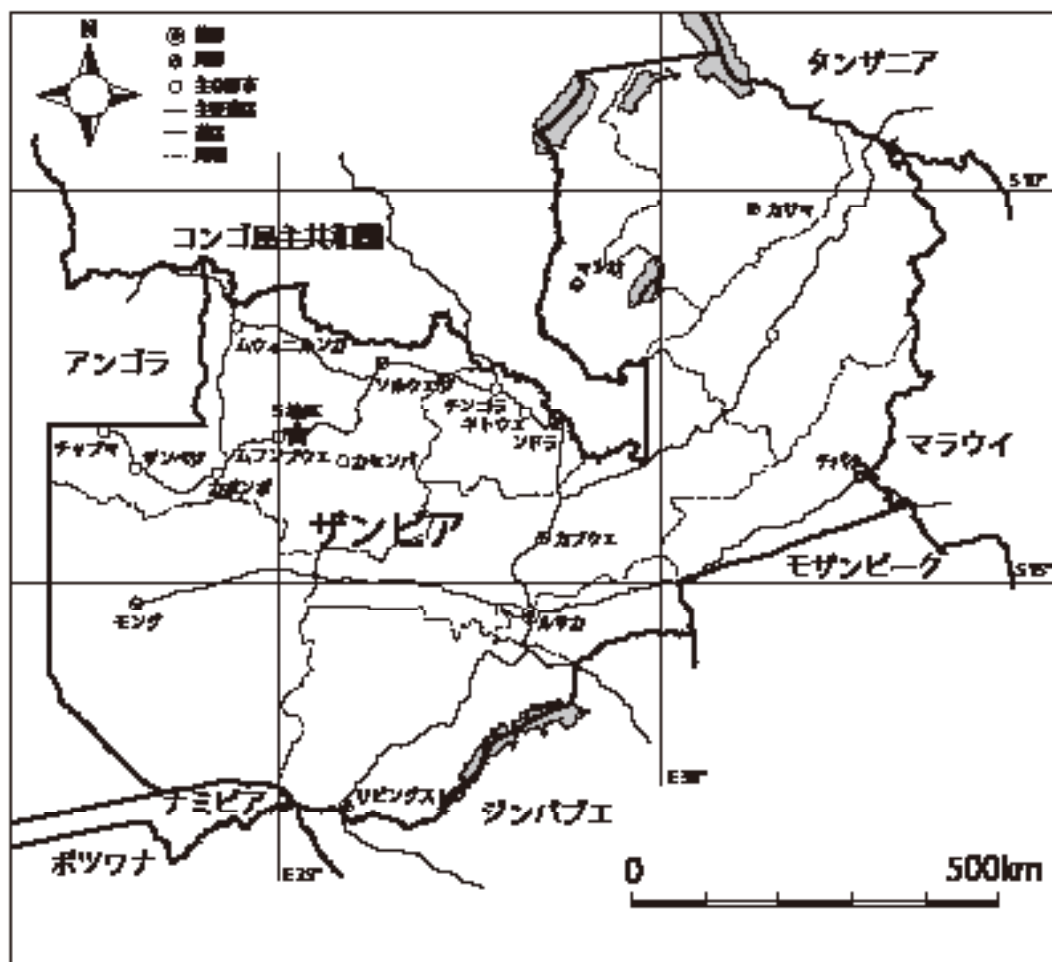


図1 S地区の位置

り、ザンビア国内においてもっとも低い [CSO 2012]。植生は、マメ科ジャケツイバラ亜科が優占する乾燥疎開林のミオンボ林であり、幹線道路から数 km 離れると広大な未開墾のミオンボ林が広がっている（写真 2）。S 地区周辺には 19 世紀の終わりのころ、現在のコンゴ民主共和国南部からカオンデの人びとが南下してきた [Jaeger 1981]。

S 地区には 2012 年 8 月現在 23 か村あり、243 世帯、1320 人が居住している。居住する民族はカオンデとルンダ、ルバレ、チョークウェ、ルチャジの 5 民族であり、伝統的に焼畑農耕を中心に漁撈や狩猟などを組みあわせて生活していた人びとである。S 地区における民族構成の割合は、カオンデの人びと



写真 2 未開墾のミオンボ林（筆者撮影）。

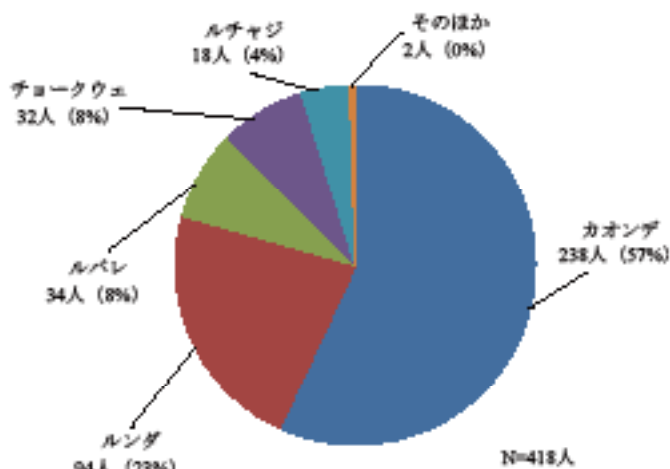


図2 S地区の民族構成



写真3 畑のそばにある出づくり小屋：農繁期の雨季には、家族全員でひっこしてくる（筆者撮影）。

るが、基本的には地区長や村長に権限が委譲されており、カオンデの社会は集権的ではなく分節的である。そのため地区内に新たな村をつくることは容易であり、村の構成員が離合集散を繰り返すことも多く、カオンデ社会は移住しやすい社会であるといえる。

S地区にもともと居住しているカオンデは、ルバ王国から派生している [Jaeger 1981]。一方でルンダやルバレ、チョークウェ、ルチャジはルンダ王国から派生しており [McCulloch 1951; Vansina 1966]、男子割礼（ルンダ語でムカンダ：mukanda）といった慣習や言語の類縁性が高い [Kashoki 1978; Oppen 1996]。これらの5民族は18世紀ごろには、ルンダ王国の統治下にあったともいわれている。またルンダとカオンデは民族間で冗談関係（ルンダ語でウセンシ：usensi）を結んでおり [Bustin 1975]、歴史的にみても5民族のあいだには近接性の高さを指摘することができる。

4. S地区における移住者の経緯

S地区に居住するカオンデ以外の人びとは、移住者である。S地区では、オイルショックにともな

が57%と半数を占めている(図2)。ルンダの人びとが23%、ルバレとチョークウェの人びとがそれぞれ8%、ルチャジの人びとが4%となっている。いずれの民族も、母系で夫方居住を基本としている。既婚夫婦の70%は同じ民族どうして結婚しているが、夫がカオンデの夫婦についてみると、その90%がカオンデどうしの結婚であった。カオンデ以外の人びとのあいだでは、異なる民族で結婚する民族間の通婚が進んできている。

カオンデの人びとは、もともとは親族を中心とした世帯数が5世帯程度の小さな村を、ミオンボ林のなかに形成し、数年おきに移動を繰り返しながら生活していた [大山 2011]。畑のそばに家建て、焼畑農耕を営みながら自給要素の強い生活をしていた。そのため道路沿いに集住した現在でも、好んで畑のそばに出づくり小屋を作る人が多い (写真3)。それぞれの村は分散しているが、10～30か村をまとめて地区が形成され、地区長が各村長をまとめている [Jaeger 1981]。伝統的首長はいくつかの地区をまとめている

う経済危機の前後である 1970 年代から、移住にともなう人口増加がみられた。2012 年 8 月時点で、S 地区人口の約 72% が移住者であり、その多くが農村の出身者である。

1960 年に北西部州カボンゴ県の農村に生まれたルチャジの S 氏は、1999 年に村長であった父親の死を契機として S 地区に移住してきた。S 氏は幹線道路沿いで町から近く、病院や学校へ行きやすいので、移住先として S 地区を選んだと語っていた。チョークウェの Sa 氏は、Sa 村の 4 代目の村長である。Sa 氏は母方のおじである 3 代目の村長とともに、北西部州チャブマ県から 1971 年に S 地区へと移住してきた。S 氏や Sa 氏は、ほかの農村から S 地区（農村）へと移住している。農村から移住してきた人びとは、S 氏のように親族の死やもめごとを移住の理由とする人が多く、このような移動性はアフリカの焼畑農耕民に共通した傾向である〔杉山 2007; 大山 2011〕。

S 地区では上述したような、どこの農村でもみられる農村間の移住のほかに、都市居住者の移住がみられた。チョークウェの Mu 氏はチャブマ県の農村出身であり、1965 年に妻と息子とともにコッパベルト州の都市であるンドラに移住した。ンドラでは、包装工場の労働者として働いていた。しかし 1969 年に失業し、移住先を探すためにンドラに家族を残し、ひとりでザンベジ県へ移住した。暮らしやすい移住先はみつからず、1971 年に家族で S 地区へ移住した。このとき Mu 氏は、ンドラのバーで知りあった S 地区の地区長との約束（ルンダ語でイシンビ:isinbi）をたよりに移住している。Mu 氏はンドラで働いていたころ、仕事が終わると毎日のようにバーに出かけて酒を飲んでいて、同じ時期にンドラで働いていた S 地区の地区長と、バーで顔をあわせるようになり、酒を飲むうちに意気投合したのである。そのとき酒を飲みながら、ンドラでの Mu 氏の仕事がなくなり、農村へ移住する気になったら、S 地区へ移住してもよいという約束を 2 人のあいだで交わしたようだ。

ルバレの E 氏は、カボンゴ県の農村に生まれた。1968 年には、夫が銅鉱山で職を得たため、コッパベルト州の都市であるキトウェに移住した。しかし夫が失業したため、1974 年にカボンゴ県にある親族が住む農村に移住した。その後の数年のあいだ、親族が住む村を転々として 1991 年に S 地区へ移住してきた。Mu 氏や E 氏は農村の出身であるが、一度都市を経由してから S 地区へ移住している。彼らのような都市経験者は、都市で暮らしていたときのつながりをたよった Mu 氏のように、個人的なつながりをたよって移住した人もいる。また Mu 氏や E 氏のように、失業をきっかけとして S 地区へ移住している都市経験者が多い。

S 地区が県都から近く、広大な未開墾地があったことから、ほかの地域の人びとが S 地区へと移住してきた。分権的なカオンデ社会においては、新しい村を作りやすいため、移住しやすかったと考えられる。カオンデ以外の人びとが S 地区に集まってきた要因としては、民族間の言語や文化の近接性の高さが指摘できる。とくにザンビアには 73 の言語が存在し、異なる言語の土地に住むことは、みずからの母語が通じる土地に住むことよりも難しい。民族が異なっても言語や慣習が類似していることは、移住先を決める際に重要な要因となりうる。民族どうしが近接していることをきっかけとして、個人的なつながりを形成し、カオンデ以外の人びとはカオンデの土地へと移住してきたのである。

5. 主食作物の組みあわせ

もともと S 地区に暮らしているカオンデの人びとも、他地域から移住してきたカオンデ以外の人びとも、すべての住民が農耕を営んで暮らしている。ほかの農村から移住してきた人びとは、前の居

住地でも農耕を中心に生活していた。また都市から移住してきた人びとは、農耕を中心とした生活をするために S 地区へ移住してきた。ここからは、S 地区に暮らす人びとの日常生活に注目し、もともと S 地区に暮らすカオンデの人びととほかの地域から移住してきたカオンデ以外の人びとが、ひとつの地区に混住し、ともに暮らしている様子を人びとの日常生活からみていこう。

S 地区でとくに栽培されている主食作物は、キャッサバとモロコシ、トウモロコシの 3 種である。一般的に S 地区では、キャッサバとモロコシは焼畑で栽培され、トウモロコシは常畑で連作されることが多い。キャッサバは収穫が可能な大きさにまで肥大すると、地中に植えたままにしておくことができ、年間を通していつでも収穫することができるようになる。また貧栄養な土壌や乾燥地でも生育することができ [Jones 1959]、比較的どこでも栽培できる作物である (写真 4)。一方でモロコシやトウモロコシといった穀類は、収穫期が決まっているため端境期が存在し、降雨変動のような気象条件にも収穫量が左右されやすい。とくにモロコシは鳥追いや収穫作業には手間がかかるが、需要が少ないため市場で販売されることはまれである (写真 5)。そのようなこともあり、最近ではモロコシは栽培されなくなっている。トウモロコシは、ザンビア国内で広く栽培されている主食作物であり、多くの人びとが換金作物としても栽培している (写真 6)。しかし貧栄養な畑で連作すると収量が下がるため、化学肥料を投入する必要がある。

S 地区の人びとは、これらの主食作物を組みあわせて栽培している。とくにモロコシを栽培している世帯は、カオンデの世帯のみであった (表 1)。またカオンデ以外の世帯の 91% が、トウモロコシとキャッサバの 2 種を組みあわせて主食作物を栽培していた。このようにカオンデとカオンデ以外の人びとのあいだには、栽培する主食作物に違いがある傾向がみられた。

Trapnell and Clothier [1957] は、1932 年から 1934 年にかけて現在の北西部州において生態学的な現地調査を実施し、当地の植生や土壌、民族によって人びとが営む農耕システムを地域ご



写真 4 キャッサバのイモの収穫：植えつけてから 3 年経つと、少しずつ収穫する。4 年をすぎると、すべてのイモを掘りとりってしまう (筆者撮影)。



写真 5 モロコシの収穫：収穫する前日にモロコシの茎を倒しておくことで、穂を摘みやすくする (筆者撮影)。



写真 6 トウモロコシ畑の除草：雨季に入るとこまめに除草しなければ、化学肥料の養分が雑草にいつてしまう (筆者撮影)。

表1 S地区の人びとが栽培する主食作物の組み合わせ

世帯	トウモロコシ	トウモロコシ キャッサバ	モロコシ そのほか	合計
カオンデ	24 (39%)	16 (26%)	21 (35%)	61 (100%)
カオンデ通婚	5 (31%)	10 (63%)	1 (6%)	16 (100%)
カオンデ以外	4 (9%)	40 (91%)	0 (0%)	44 (100%)
合計	33 (27%)	66 (55%)	22 (18%)	121 (100%)

註) そのほかはトウモロコシ、キャッサバ、シコクビエのいずれか、もしくはその組み合わせである。

カオンデ通婚の世帯とは、夫もしくは妻のどちらか一方がカオンデの世帯のことである。

とに分類した。カオンデは、モロコシを中心としたブロックチテメネと呼ばれる焼畑農耕を営むと報告されている。一方でルンダやルバレ、チョークウェ、ルチャジについては、焼畑でシコクビエやトウジンビエをキャッサバと組み合わせて栽培していると記述されている。また Melland [1967] は、カオンデがモロコシを主要な作物として栽培していると紹介し、Oyama and Kondo [2007] は、モロコシを中心に栽培する焼畑農耕民であるカオンデのブジミと呼ばれる農耕システムについて詳述している。このように先行研究において、カオンデはモロコシを、ルンダやルバレ、チョークウェ、ルチャジはキャッサバを栽培するというように記述されてきた。実際に調査中にも「カオンデはモロコシが好き」や「キャッサバはルンダが食べるもの」というような、民族と作物を関連づけて認識しているような発言がよく聞こえた。しかし今日では、必ずしも民族と農耕システムや栽培作物が対応するわけではなく、気候変動や農業政策の転換といった自然環境や社会経済の変化のため、世帯によって栽培する作物に対する志向性は異なっている。

本調査の結果からは、世帯によって主食作物を栽培する面積の比率は異なっていることが明らかになった。たとえばトウモロコシとキャッサバを栽培する世帯のなかでも、トウモロコシを中心に栽培する世帯とキャッサバを中心に栽培する世帯がある。同じ作物を栽培する世帯でも、重視する主食作物が異なるため、トウモロコシ畑とキャッサバ畑、モロコシ畑の耕作面積は、世帯によって差が生じている。このようにS地区の人びとは、3種の主食作物を組み合わせて栽培しているが、カオンデの人びとはトウモロコシやモロコシを中心に栽培し、カオンデ以外の人びとはトウモロコシとキャッサバを中心に栽培するという傾向がみられた。現在でもS地区では、先行研究が報告したようなカオンデはモロコシ、ルンダやルバレ、チョークウェ、ルチャジはキャッサバという栽培作物の傾向をみることができる。

6. 各世帯の食生活

世帯によって栽培する主食作物が異なれば、食生活も異なるはずである（写真7）。とくにカオンデの人びととカオンデ以外の人びとのあいだで、栽培する主食



写真7 クリスマスの日の夕飯：村びとの多くはキリスト教徒であり、クリスマスは特別なので、肉を食べる。左がサツマイモの葉、中央がインパラの肉、右がトウモロコシとキャッサバを混ぜたシマと呼ばれる練り粥（筆者撮影）。

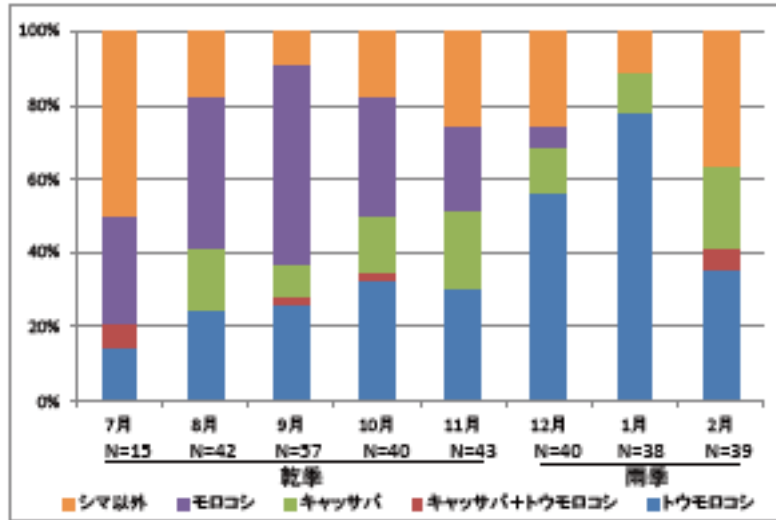


図3 G世帯における主食の月別変化（2012年7月～2013年2月）

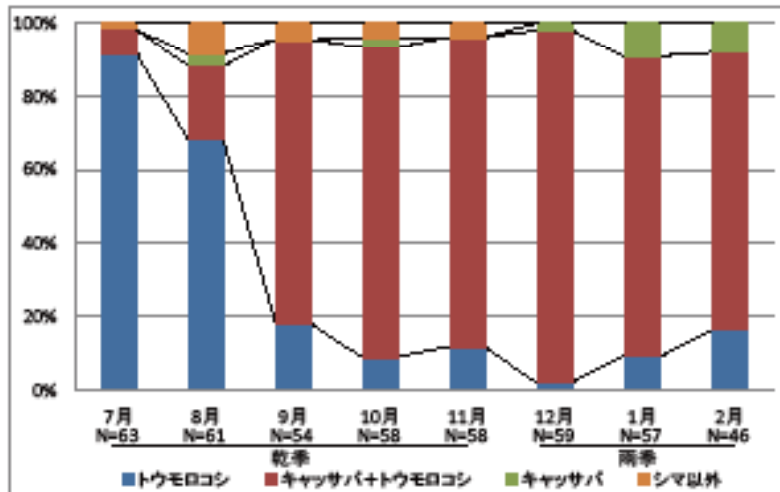


図4 L世帯における主食の月別変化（2012年7月～2013年2月）

作物の組みあわせが異なっていた。栽培する主食作物の違いが、人びとの食生活にどのような違いをもたらしているのか検討していこう。2012年7月から2013年2月にかけての主食の季節変化を追うことで、カオンデの世帯とカオンデ以外の世帯の食生活の違いをみていきたい。

G世帯は、夫婦ともにカオンデの世帯である。2012年にはトウモロコシとモロコシのほかに、キャッサバを数うねだけ、小規模に栽培していた。G世帯はモロコシの収穫を開始した7月以降、モロコシが底を尽きる12月までは、モロコシのシマを食べている（図4）。モロコシが底を尽き、保管しているトウモロコシも少なくなってきた2月には、キャッサバやサツマイモといったイモ類やカボチャなどを主食として利用することで、毎日の食事を確保していた。このようにトウモロコシやモロコシを中心に栽培するカオンデの世帯では、端境期に主食を確保することが課題となっており、キャッサバを食べることで毎日の食事を確保していた。

L世帯は、トウモロコシとキャッサバを栽培している。ルンダのL氏はチョークウェの妻と6人

の子どもたちの計8人で暮らしている。L氏は2008年から2010年まで、ムフンブウェの町で病院建設に従事していたため、新しい焼畑（キャッサバ畑）を造成することができなかったが、トウモロコシ畑については妻が毎年耕作していた。L世帯はキャッサバが収穫できるようになった9月以降には、キャッサバとトウモロコシを混ぜたシマ（練り粥）を食べている（図3）。しかし雨季の1月や2月になると、保管しているトウモロコシの底が尽きはじめたため、キャッサバだけのシマを食べるようになっている。このようにキャッサバを栽培しているL世帯では、トウモロコシの端境期には、キャッサバの割合を増加させることで、主食がなくならないようにしている。

7. キャッサバのやり取り

S地区の人びとはトウモロコシやモロコシの端境期には、キャッサバをはじめとしたイモ類を利用することで、主食を確保していた。年間を通して利用できるキャッサバには端境期が存在せず、食料不足を補う主食としても重宝されている。しかしキャッサバをあまり栽培していない世帯は、トウモロコシやモロコシの端境期にキャッサバをほかの世帯から入手する必要がある。S地区内において、キャッサバがどのようにやり取りされているのかみていこう。

S地区内で25a以上のキャッサバ畑を耕作している30世帯に対して、キャッサバのイモ（ルンダ語でムカンバ：mukamba）と種茎（ルンダ語でンディンブ：ndimbu）の提供経験について聞き取った（表2）。種茎とは種となる茎であり、キャッサバの茎を約30cmの長さに切ったものである。キャッサバをはじめて植えつけるときには、種子ではなく種茎を用い、地面に対して垂直になるように種茎を挿して植えつけるのである。

キャッサバのイモを販売したことがある世帯は19世帯、贈与したことがある世帯は12世帯であり、その提供先の多くはカオンデの世帯であった。とくに雨季の11月から3月にかけて、イモを分けてもらいに来るカオンデの人が多くと話す人が多かった。キャッサバの種茎を贈与したことがある世帯は21世帯であり、種茎は無償で贈与することが多く、その提供先は民族に関係がなかった。イモはキャッサバを栽培していないカオンデの人びとへ提供され、種茎は民族に関係なく提供されていた。このようにキャッサバのイモも種茎も同じ民族のなかだけでやり取りされるわけではなく、親族や民族といった関係をこえた個人的なつながりからやり取りされている。とくにイモに関しては、カオンデとカオンデ以外の異なる民族間において頻繁にやり取りされている。

S地区が県都ムフンブウェの町に近いということもあり、人びとは多くの食料を購入している（表

表2 キャッサバ栽培者のキャッサバ提供経験

	調査数	イモ		種茎	
		贈与	販売	贈与	販売
ルンダ	11	5 (17%)	10 (33%)	8 (27%)	1 (3%)
チョークウェ	7	3 (10%)	4 (13%)	4 (13%)	2 (7%)
ルチャジ	5	1 (3%)	1 (3%)	4 (13%)	1 (3%)
ルバレ	4	1 (3%)	3 (10%)	3 (10%)	1 (3%)
カオンデ	1	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
不明	2	2 (7%)	1 (3%)	2 (7%)	0 (0%)
合計	30	12 (40%)	19 (63%)	21 (70%)	5 (17%)

註）表中の割合は、全調査世帯数（30世帯）に対する割合である。

調査対象期間：イモ 2012年1月～2013年1月

種茎 2011年1月～2013年1月

表3 S地区におけるおもな食材の入手先

品目	店舗で購入	個人から購入	譲り受け	合計
野菜類	58 (53%)	38 (35%)	13 (12%)	109 (100%)
トウモロコシ	3 (38%)	4 (50%)	1 (12%)	8 (100%)
動物性タンパク質	82 (61%)	44 (33%)	8 (6%)	134 (100%)
調味料類	134 (99%)	0 (0%)	1 (1%)	135 (100%)
その他	24 (89%)	0 (0%)	3 (11%)	27 (100%)
合計	301 (73%)	86 (21%)	26 (6%)	413 (100%)

註) 2013年1月～2月(合計30日間)のS地区内の5か村における、各世帯の非自給食材の入手先。

3)。とくにおかずや調味料類を購入することが多く、人びとが食料を譲り受けることは少なかった。しかし地区内の多くの世帯で毎日の食料を店で購入しているにもかかわらず、キャッサバは個人間でやり取りされていた。人びとはどのようなつながりを利用して、キャッサバを入手しているのだろうか。

A氏とKa氏はともにチョークウェであるが、親族関係にはない。しかしA氏の母親とKa氏が友人(ルンダ語でイバンブ: ivambu)である。トウモロコシだけを栽培しているKa氏は、キャッサバを入手するため、2013年1月にA氏の家を訪れ、乾燥キャッサバ1バケツ(5ℓの容量)を6クワチャ(1クワチャ=約19円)で購入した(写真8)。また翌々日には、A氏が乾燥キャッサバ8バケツをKa氏に提供し、女性用サンダルを受け取っている。キャッサバを栽培していないKa氏は、キャッサバがほしいときには、A氏のような仲のよい知りあいからキャッサバを購入している。A氏はこのとき以外にも、頻繁にKa氏にキャッサバを提供している。

ルンダのL氏とカオンデのG氏は、同じ教会に所属している友人である。2013年1月、主食のトウモロコシが少なくなったG氏はキャッサバを入手するため、インゲンマメ1バケツを携えてL氏を訪ねた。L氏はインゲンマメを栽培していなかったため、とても喜び、乾燥キャッサバ1バケツと等量で交換した。

親族や民族という枠組みだけではなく、友人や知人という個人的なつながりを利用してキャッサバを入手している人びとが、S地区には多くいる。このような親族や民族をこえた個人的なつながりは、食料不足のときにも形成される。

2001/2002年の雨季は大雨だったため、トウモロコシとモロコシの収量が例年よりも低下した。そのためトウモロコシやモロコシを中心に栽培していたカオンデの人びとは、食料不足におちいり、キャッサバを求めることになった。2003年1月、カオンデのK氏は乾燥キャッサバを路上で販売していたルンダのL氏から、畑のマウンドを造成した報酬として乾燥キャッサバを入手した。このできごとと



写真8 雨季のキャッサバ乾燥方法: 雨が降ると、毒抜き後のキャッサバをたき火のうえにつるして乾燥させる。人びとは乾燥キャッサバをやり取りすることが多い(筆者撮影)。

降、K氏とL氏はよく話すようになり、お互いの家を訪問しあうなど頻繁に交流するようになったという。人びとはトウモロコシやモロコシの端境期にキャッサバを介して、個人的なつながりを形成することもある。

8. おわりに

S地区に暮らすルンダやルバレ、チョークウェ、ルチャジの人びとは、さまざまな経緯から移住してきた。とくに都市を経由してS地区へ移住してきた人びとは、松田〔1995〕が報告しているみずからの出身地域や出身村に帰村するUターンや、小倉〔2009〕が指摘しているみずからと同じ民族の領域にある地方都市に移住するJターンとは異なる動きをしていた。彼らはみずからの民族とは異なる地域であり、それまではつながりのなかったカオンデの土地であるS地区を選択している。都市からの移住者は、同一民族や親族といったつながりだけではなく、個人的なできごとを手がかりに築いたつながりをたよっている。

もともとカオンデの土地であるS地区は、多民族が混住する農村である。そこではキャッサバとモロコシ、トウモロコシの3種が、主食作物として栽培されていた。その組みあわせは世帯によって異なり、とくにキャッサバを栽培していない世帯にとって、トウモロコシやモロコシの端境期である雨季に主食を確保することは重要である。キャッサバを栽培している世帯は、キャッサバのイモをカオンデの人びとに提供していた。大山〔2011〕はカオンデの農村における食料のやりとりについて、村内では現金を介した売買ではなく、現金を介さない贈与や分配が基本とされていると述べている。しかしS地区の人びとは、端境期の主食を確保するうえで、親族や民族といった系譜でたどれるつながりだけではなく、村という単位をこえて友人や知人といった個人的なつながりをたよっていた。このような移住の経緯をもつ多民族の人びとが暮らすS地区では、ひとりひとりの出自や民族、親族関係のような系譜でたどれるつながりだけではなく、友人（イバンプ）や知人といった個人的なつながりを維持しながら人びとは生活している。

参考文献

- Bustin, E. 1975. *Lunda under Belgian Rule: The Politics of Ethnicity*. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press.
- Central Statistical Office 2012. *Zambia 2010 Census of Population and Housing: Population Summary Report*. Lusaka: Central Statistical Office.
- Jaeger, D. 1981. *Settlement Patterns and Rural Development: A Human Geographical Study of the Kaonde Kasempa District, Zambia*. Amsterdam: Royal Tropical Institute.
- Jones, O. W. 1959. *Manioc in Africa*. Stanford and California: Stanford University Press.
- Kashoki, M. E. 1978. The Language Situation in Zambia. In S. Ohannessian and M. E. Kashoki eds., *Language in Zambia*. London: International African Institute, pp. 9-46.
- Kashoki, M. E. and M. Mann. 1978. A General Sketch of the Bantu Languages of Zambia. In S. Ohannessian and M. E. Kashoki eds., *Language in Zambia*. London: International African Institute, pp. 47-100.

- Kodamaya, S. 2011. Agricultural Policies and Food Security of Smallholder Farmers in Zambia, *African Study Monographs, Supplementary Issue* 42: 19-39.
- Logan, C. 2009. Selected Chiefs, Elected Councillors and Hybrid Democrats: Popular Perspectives on the Co-existence of Democracy and Traditional Authority, *The Journal of Modern Africa* 47: 101-128.
- Lukanty, J. and A. P. Wood. 1990. Agricultural Policy in the Colonial Period. In A. P. Wood, S. A. Kean, J. T. Milimo and D. M. Warren eds., *The Dynamics of Agricultural Policy and Reform in Zambia*. Ames: Iowa State University Press, pp. 3-19.
- Mamdani, M. 1996. *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*. Princeton: Princeton University Press.
- McCulloch, M. 1951. *The Southern Lunda and Related Peoples*. London: International African Institute.
- Melland, F. H. 1967. In *Witch-Bound Africa: An Account of the Primitive Kaonde Tribe and Their Beliefs*. London: Frank Cass and Co. Ltd.
- Murdock, G. P. 1959. *Africa: Its Peoples and their Culture History*. New York: McGraw-Hill Book.
- Oyama, S. and F. Kondo. 2007. Sorghum Cultivation and Soil Fertility Preservation under Bujimi Slash-andburn Cultivation in Northwestern Zambia, *African Study Monographs, Supplementary Issue* 34: 115-135.
- Trapnell, C. G. and J. N. Clothier. 1957. *The Soils, Vegetation and Agricultural Systems of North-Western Rhodesia*. Lusaka: The Government Printer.
- Vansina, J. M. 1966. *Kingdoms of the Savanna*. Madison, Milwaukee and London: The University of Wisconsin Press.
- von Oppen, A. 1996. *Terms of Trade and Terms of Trust: The History and Contexts of Pre-colonial Market Production around the Upper Zambezi and Kasai*. Münster and Hamburg: LIT Verlag.
- 大山修一. 2011. 「アフリカ農村の自給生活は貧しいのか？」『E-journal GEO』5: 87-124.
- 小倉充夫. 1995. 『労働移動と社会変動—ザンビアの人々の営みから』有信堂.
- 小倉充夫. 2009. 『南部アフリカ社会の百年—植民地支配・冷戦・市場経済』東京大学出版会.
- 児玉谷史朗. 1995. 「ザンビアの構造調整とメイズの流通改革」原口武彦編『構造調整とアフリカ農業』アジア経済研究所, pp. 57-94.
- 児玉谷史朗. 2003. 「ザンビアにおける自由化後のトウモロコシ流通と価格」高根務編『アフリカとアジアの農産物流通』アジア経済研究所, pp. 87-126.
- 島田周平. 2007. 『アフリカ可能性を生きる農民—環境—国家—村の比較生態研究』京都大学学術出版会.
- 杉山祐子. 2007. 「『ミオンボ林ならどこへでも』という信念について—焼畑農耕民ベンバの移動性に関する考察」河合香吏編『生きる場の人類学—土地と自然の認識・実践・表象過程』京都大学学術出版会, pp. 239-269.
- 松田素二. 1995. 「構造調整期の都市社会—出稼ぎ民コロニーの分散とUターン現象」『アフリカ研究』47: 33-48.

第3章 ザンビア南部における女性の現金稼得と友人関係の形成—トンガの「友情セレモニー」の事例—

成澤 徳子

1. はじめに

アフリカの農村社会におけるジェンダーに関する研究では、とりわけボズラップの著作 [Boserup 1970] が発表されて以降、女性の地位や社会経済的な位置づけに焦点があてられてきた。女性は元来、農業生産や家計消費に関して高い自律性を有していたが、植民地支配と近代化・開発政策、資本主義の進展が、出稼ぎや換金作物生産など男性を市場経済に組み込む一方で、自給農業と再生産労働を女性の領域として固定化し、資源アクセスや労働分担などに関する男女間の不平等を招いたという認識が、研究者や実務家の間で広く共有されてきた。その後、女性を対象とした開発介入や経済自由化の影響などを受けて 90 年代以降は、多様な非農業活動に着手し現金を稼ぎ始めた女性たちが、各世帯の生存レベルで重要な役割を担っている実態が明らかとなってきた。しかしそれも女性個人にとっては、稼ぎの大半を家族のために支出しており、再生産労働に関わる義務の延長と労働の過重化がもたらされたにすぎず、女性の基本的役割は今日に至っても何ら揺るぎないことが指摘されている [cf. Dennis 1991; Vaa 1991; Geisler 1992; Bryceson 1999; Araki 2001]。また、家庭内の役割放棄や男性の威信への脅威などを理由に、女性の現金稼得が男性側に受容されにくく、ジェンダー関係が緊張度を増してきていることも問題とされている [cf. Whitehead 1990; von Bülow 1992; Pottier 1994; Harris 2006; Kyomuhendo 2009]。

これらの研究は、マクロな構造レベルで女性が周縁化されていくプロセスを明らかにすることに貢献してきた。一方で、ジェンダー間の不平等や不均衡な権力関係を強調するあまり、女性たち自身が自らのおかれた立場をどのように理解し、女性たちを取り巻く関係性のなかでいかに自らの暮らしや生き方を探求しようとしているのかという、女性のエージェンシーにかかわる問題が看過されてきたといえる。

報告者はこれまで、ザンビア南部に暮らす農耕民トンガを対象に、ジェンダーに基づく様々な社会経済的制約のなかで、女性が近年どのように個人的な現金へのアクセスを実現してきているのか、それがどのような活動につながり、彼女たちの暮らしにどのような変化をもたらしてきているのかについて解明することを試みてきた。

女性たちは、既存の社会関係が反映されるローカルな地酒飲み場や儀礼の場での各種生産物・加工品販売をおこない、定期市のない社会において自分たちの「いちば」を創出し現金稼得を実現していた。こうして得た現金は家族のための生産や再生産への支出だけに充てられるのではない。例えば、女性たちは稼いだ現金を利用して友人同士で贈り物を交換し絆を深める祝祭を創出し、自らの生活の保障や潤いを他者との関係性のなかでつくりだしていた。

このデロングウェ (*Cilongwe*) と呼ばれる祝祭は、調査地域で 90 年代以降に盛んに開催されるようになり、農閑期に女性の間でのみおこなわれている。デロングウェとは、トンガ語で友情という意

の名詞である。その名の付いた祝祭を、語源である友情と区別するため、本稿では「友情セレモニー」と呼ぶこととする。本報告では、トンガの「友情セレモニー」の内容に関する報告者のこれまでの調査結果をまとめ、女性たちが社会的関係性のなかで発揮するエージェンシーの可能性について検討したい。

2. 調査地の概要

調査地は、ザンビア共和国南部州モンゼ県の東部に位置する M 村である。M 村を含め南部州一帯は、15～16 世紀にかけてこの地域に移住したバントゥー系農耕民トンガの主な居住域である。

南部州の鉄道沿線地帯は、植民地時代における国内北部の銅鉱山の開発、及び鉄道建設を契機に、都市鉱山労働者向けの食糧供給地として小農の商業的農業が発展してきた地域である [Chipungu 1988; 児玉谷 1993]。トンガの人びとは白人入植者から牛耕を学び、モロコシやシコクビエの移動耕作から改良品種のトウモロコシ常畑栽培に農業を転換・集中させることで現金収入を得てきた。各世帯において、男女協働の換金作物生産から得る農業所得は男性が掌握し、農外所得の稼得も男性が担ってきた。20 世紀半ば頃から、地酒が金銭による売買の対象となってからは、その醸造販売が女性にとってほぼ唯一の現金稼得手段であった [Colson 1958; Colson and Scudder 1988]。

1990 年代以降、市場経済化や牛疫の発生、干魃など一連の影響により、トンガの人びとの主生業である農業生産が停滞している。例えば M 村では、筆者が 2008 年におこなった調査によれば、全体の約 7 割の世帯が自給用のトウモロコシを賄うことができるか否かの状態で、余剰分を出荷することは困難となっている（表 1）。またトンガの人びとは、大規模な牛群をもつ牛飼養民として知られてきたが、1991 年に発生した東海岸熱をはじめとする牛疫の蔓延により、数年間で百頭以上のウシを失った者も多い。筆者が 2006 年におこなった調査によれば、ウシを全く所有していない世帯は M 村全体の約 6 割にのぼっている（表 2）。

表 1 M 村におけるトウモロコシの世帯別出荷量（2008 年）

袋 (50kg) 数	世帯数
≥ 300	1
100-299	1
50-99	3
20-49	4
0-19	6
0	37
合計	52

出典：筆者の調査結果をもとに作成

表 2 M 村におけるウシの世帯別所有頭数（2006 年）

頭数	世帯数
≥ 100	1
20-99	0
10-19	4
5-9	4
1-4	11
0	30
合計	50

出典：筆者の調査結果をもとに作成

農業所得の減少とともに、教育費や医療費など日常生活における現金の必要性が増大するなかで、農閑期を中心に、女性による多様な非農業活動とそれによる現金稼得が展開してきている。女性たちはそうして稼いだ現金を、家族のための支出に充てる一方で、自身の各種社会活動にも積極的に投資している。その顕著な事例のひとつが、村の農閑期に開催される「友情セレモニー」である。

3. 「友情セレモニー」のしくみ

「友情セレモニー」は、ペアを組んだ女性2人が互いの家に定期的集まり、贈り物の贈与交換と食事による歓待を繰り返すことで、個人的な知人関係をより強固な友人関係へと発展させるためのものである。またこのセレモニーには、主催する当人たちの関係の深化だけでなく、主催者に協力する友人や、主催者を祝福するために近所から集まった大勢の聴衆など、主催女性が帰属する集団の他の女性が新たな社会関係をつくりだすきっかけを提供する役割もある。その内容について、以下に説明する。

3-1. 主催者と参加者

「友情セレモニー」は、ペアを組んだ女性2人がどちらか一方の家に集い、贈り物の贈与と食事による歓待をおこなう会である。会の当日、相手の家を訪問する女性は、贈り物を自宅から持参して相手に贈与する（写真1）。相手を自宅に招いて贈り物を贈られる女性は、豪華な食事を用意して相手をもてなす。この会は、女性ペアの間で毎年もしくは2年に1度のペースで開催される。贈り物を贈与する役と食事によって歓待する役は、会を開催する度にペアの間で交代する。



写真1 贈り物は、聴衆の面前でひとつひとつ数えられ、披露される（2009年、筆者撮影）。

「友情セレモニー」は、主催者2人だけで執りおこなわれるわけではない。当日の会は、主催者を手伝う者（以下、「協力者」と呼ぶ）やその他大勢の聴衆も参加する大規模な宴となる。協力者と聴衆は全員、女性である。

主催者2人は各自、初回の会の開催前に、協力者を4人ずつ、自身の友人のなかから選出する。選出された協力者たちの交代は基本的にはなく、毎年同じメンバーがそれぞれの主催者を手伝う。協力者は、自身の友人である主催者が贈り物を贈与する役の年にはその付添人として、会の当日に贈り物の運搬を手伝いながら相手の家を一緒に訪れ、用意された食事を共に食し、会の終了まで行動を共にする。一方で協力者は、友人である主催者が相手女性を自宅に招き歓待する役の年には、会の当日に食事の調理と給仕を手伝う。その際、訪問してくる相手女性とその付添人、計5人に提供する食事とは別に、聴衆に振る舞うための大量の食事と同時に用意される。

村内外から集う聴衆は、主催者たちの友人や知人であり、彼女たちには主催者たちから事前に招待状が送られ、会の開催日が通知される。ただし、招待状の有無に関わらず、参加費を当日に支払えば、女性は誰でも参加することができる。参加費は、主催者2人の友情を祝福する祝儀であり、参加者に振る舞われる食事代を含め、会の開催経費を念頭に支払われるものである。参加費は参加者に対して一律定額で、一人当たり10クワチャ（約200円）が一般的である。

聴衆は、会場である主催者宅の庭先に集い、歌と踊りを通して主催者2人を祝福し、会を盛り上げる（写真2）。踊りには、太鼓やシェイカーなどの打楽器を演奏する音楽隊が欠かせない。演奏に

長けた地元男性数名によって構成される音楽隊は、自宅が会場となる主催者によって現金で雇用される。彼らには、聴衆と同様の食事が無償で提供される。

3-2. 贈答品

「友情セレモニー」で相手に贈与する贈り物は、前年の会で相手から贈与された贈り物と比べて、より高価な品々にしなければならない。即ち、女性ペアのあいだで、会を開催するたびに贈り物が高価になっていく。最終的に、相手への贈り物をより高価にすることが困難となった時点で「友情セレモニー」の

開催は終焉し、ペアが解消される。ただし、その終焉を迎える前に、途中でペアの片方が、家計の悪化や離婚による遠方への移住など、何らかの事情で開催を継続できなくなることもある。継続が不可能な状況に至った女性には、その時点までに相手に贈与した贈り物より高価な贈り物を相手から受贈している場合に限り、その差を品物もしくは現金で相殺する厳格な義務が生じる。また、ペアの片方が死去した場合には、その親族の女性にペア関係が相続され、生存する相手との「友情セレモニー」が継続されることもある。

「友情セレモニー」では実際に、どのような品々が贈られるのだろうか。表3は、M村に居住する50代の女性Nが、M村近郊の別村に居住する同年代の女性Sとおこなった「友情セレモニー」で両者が贈与し合った贈り物の内容を示している。この表に示されるように、「友情セレモニー」での贈り物は一般的に、台所用品や石鹸などの生活必需品と、靴や衣服といった女性のファッション・アイテムで構成されている。また、品物にはその種類によって、前回のセレモニーで相手から贈与された品より高価にする方法が2通りある。靴や衣服などは通常、素材を変えて品質を上げることで贈り物の価値が高められるものであり、一方で皿やコップ、腰巻布のように、品質の向上よりも個数の増加が重視される品々もある。

その他、「友情セレモニー」で見かける贈り物には、調理用のアルミ鍋や鉄鍋、フライパン、水汲み用のバケツ、リビングの床に敷くフロアシートやソファなど、主



写真2 聴衆に囲まれ、祝福される主催女性（2009年、筆者撮影）。

表3 女性Nと女性Sの「友情セレモニー」で贈与された贈り物の品目数

	セレモニー (開催年)	第1回 (1998年)	第2回 (2000年)	第3回 (2002年)	第4回 (2004年)
品目	贈与者	女性N	女性S	女性N	女性S
皿		8	10	18	26
腰巻布		2	3	0	6
靴		1	1	1	1
頭巾		1	1	0	0
伝統衣装 (スーツ)		0	1	1	0
コップ		0	0	4	8
風呂石鹸		0	0	1	0
洗濯石鹸		0	0	1	0
たらい		0	0	0	1
包丁		0	0	0	1
スプーン		0	0	0	10
洋服 (スーツ)		0	0	0	1

出典：筆者の調査結果をもとに作成

催女性の嗜好や必要性に応じて多様な品目がある(写真3)。

4. 「友情セレモニー」で関係性を育む相手

女性が「友情セレモニー」の開催を望むに至った場合、必要なのはその相手選びである。女性は、自身の血族や姻族といった親族関係にある女性のなかから相手を選ぶことはない。村の女性たちによれば、その主な理由は以下の2点にある。

第一に、相手が「友情セレモニー」の開催に対する何かしらの経済的困難を抱えた際に、相手が自身の近親者であるほど、その問題の詳しい内情

を容易に知り得る分、情に流されやすく、あるいは情に流されざるを得ず、セレモニーの延期や中止といった相手の申し出を拒否できない可能性が高くなる。このような道徳的規範を理由に、親族女性を相手として選ぶことは、「友情セレモニー」の重要な構成要素のひとつである継続性にとって不都合とされる。第二に、トンガの社会では、親族への贈り物の贈与は、贈与者が受贈者からの返礼を期待しない贈与であるという規範が存在する。従って、贈り物の贈与に対する一定期間内における相手からの返礼(次の会で、より高価な贈り物を相手から受贈すること)を前提とする「友情セレモニー」の相手に親族女性を選ぶことは、トンガの社会的規範に反する行為であるため忌避される。

また、女性が選ぶ「友情セレモニー」の相手は必ずしも、以前から自分と親しい間柄の友人とは限らない。知人程度の仲であっても、相手として好ましいと思われる人物が見つければ、パートナーとなるよう依頼する。村の女性たちによれば、女性は相手候補についてよく知らない場合、相手として相応しい人物であるかどうか確認するために、事前に下調べをする。主な調査項目として挙げられたのは、以下の3点である。

第一に、女性は相手候補とその同居家族の経済状況を確認する。主生業である農業の経営規模や、副業で営むビジネスの内容などを知り、「友情セレモニー」を安定的に継続できる相手かどうかを見極めるという。第二に、相手の家族構成を把握する。特に、相手が単身女性か既婚者かでは、パートナーにするうえで大きな違いがある。相手に夫がいる場合は、妻が「友情セレモニー」をおこなうことに対して好意的な人物であるか否か、彼の意向を確かめておかなければならない。「友情セレモニー」を主催する妻は、その費用を基本的には自身で賄うが、自宅の敷地に大勢の人を呼んで大規模に宴を催すことは、家長である夫の同意がなければ不可能であるという。一方、夫の理解さえ得られれば、単身女性より既婚者のほうが、「友情セレモニー」の相手として好ましい場合もある。相手の夫の承諾を得てペアを組んでおけば、相手にはいざという時に夫からの援助を得られる可能性が担保され、「友情セレモニー」開催の継続性が高まるためである。第三に、相手の性格や素行を可能な限り知っておく必要がある。たとえ経済的な条件が整っていて家族の理解も得ている人物であっても、自分が好意を持てる相手かどうかが一番重要な点であるという。「友情セレモニー」では、相手が喜びそうな贈り物を自分なりに想像して用意しなければならないが、自身が好意を寄せる相手でなければ、彼女の気持ちになって贈り物を吟味することは難しい。積極的に友情を育んでいきたいと思う相手とお



写真3 贈り物のソファーを担いで「友情セレモニー」の相手宅へ向かう女性たち(2012年、筆者撮影)。

こななければ、「友情セレモニー」は成立しないのである。

「友情セレモニー」をおこなう相手の条件として、居住村は限定されない。村の女性たちによれば、同村や近隣村に住む女性だけでなく、遠方の農村や都市に暮らす女性とペアを組む事例もあるという。ただしそのような事例は少なく、一般的には、自宅から徒歩で通える圏内の村落に居住する相手と組まれる。また、女性が選好する相手は同年代の女性に限らず、世代を超えてペアが成立する場合もある。一人の女性が同時期に複数の相手をもつことは可能であるが、その分経済的な負担も大きくなるため、2人以上の相手をもつ者は一部の女性に限られる。

5. 「友情セレモニー」の魅力

村の女性たちにとって、「友情セレモニー」をおこなう理由、その魅力はどのような点にあるのだろうか。まず、女性の間で贈り物として人気のある台所用品は、トンガの社会において、その調達や管理が各家庭で調理を担う女性の役割であるとされる。村の女性たちによれば、台所用品はまた、世帯の現金収入を掌握する男性家長が、家計のやり繰りのなかで購入を最も後回しにするものでもあるという。そこで女性たちは、世帯の家計が農業投入財や子どもの養育費といった大規模な出費、あるいは食費や医療費など家族の生存を支える出費の捻出に日々追われるなかで、「友情セレモニー」の継続的な開催を通じて、台所用品をはじめとする家族のための生活必需品を確実に入手しているのである。一度に入手された多くの日用品は、全てがすぐに使用されるわけではなく、余った品々はスペアとして自宅で大切に保管され、使用品が故障した際などの備えとなる。即ち、女性にとって「友情セレモニー」には、自身や家族が購入しそびれる日用品を確実に相手と贈答し合うことで、自らの家庭内役割を着実に果たすことができるという利点があるといえる。

台所用品と同じく主要な贈り物である相手女性個人のための服飾品は、家族のための実用品である台所用品以上に、女性たちが最もアクセスしにくいものである。従って「友情セレモニー」は、ゼロングウェという、在来の人と人との関係性の概念、つまり「友情」という一種のモラルを建前とすることで、男性側に容認されやすいかたちで奢侈品を入手し、自らの生活の保障や潤いを得る、女性たちによる創造的実践であると捉えることも可能であろう。

また、村の女性のなかには、「友情セレモニー」で家族以外の他者との関係性を育んでおくことは、その相手から自身の家族の葬式を開催する際に援助を見込めるなど、いざという時のための「投資である」と回答する者もいる。つまり、女性の「友情セレモニー」活動には、暮らしのなかで突発的に生じ得る自身や家族の困窮時を想定し、家族や親族の枠を超えた相互扶助ネットワークの形成に常日頃から努める社会性や政治性も含まれている。

調査地における「友情セレモニー」の興隆の背景には、女性たちにとって、以上に挙げられたような実利的な理由が存在する。一方で、相手が喜びそうな贈り物を選んで贈る／贈られる喜びをはじめ、「友情セレモニー」をきっかけに他者とのためめ相互交渉のなかで友情を育み人生を楽しむことこそが、女性たちにとっての「友情セレモニー」の醍醐味であることはいうまでもない。

6. おわりに

ゼロングウェと呼ばれるトンガ女性の「友情セレモニー」は、友人との贈与と歓待の繰り返しを聴衆に披露し、贈られた品を日常的に身につけ使用することで、自身と大勢の他者に共有された記憶に

より、二者間の個人的な絆を常に確かめ合い、より確かなものとする装置であるといえる。この「友情セレモニー」は、女性の贈答慣行が主役となった、男性威信経済の枠にとらわれない、生活の保障や潤いを他者との関係性のなかで見出していく営みである。このような女性の生活実践は、アフリカ農民女性の生業とジェンダーに関する先行研究においてこれまでマクロな構造レベルで指摘されてきた、構造的抑圧とそれに抗する自律的主体という二元論の見方では捕捉されないものである。トンガ女性の贈答・交換が織りなす社会関係の形成を、彼女たちが元来もつ、自分たちのエージェンシーを発揮する姿として捉え、今後も注目していきたい。

付記

本研究は、公益財団法人松下幸之助記念財団研究助成「アフリカ農村における女性による社会的ネットワークの形成に関する新視角—ザンビア・トンガの『友情セレモニー』を事例に」（2012年度）ならびに独立行政法人日本学術振興会特別研究員奨励費「アフリカ農村における女性の贈答慣行にみる社会関係の形成と展開」（2013-2015年度）による成果の一部である。記して謝意を表する。

参考文献

- Araki, M. 2001. Different Meanings and Interests over Women's Clubs in Rural Zambia: An Ethnography of Development in Practice, *African Study Monographs* 22(4): 175-193.
- Boserup, E. 1970. *Woman's Role in Economic Development*. London: George Allen and Unwin Ltd.
- Bryceson, D. F. 1999. African Rural Labour, Income Diversification & Livelihood Approaches: A Long-term Development Perspective, *Review of African Political Economy* 26(80): 171-189.
- Chipungu, S. N. 1988. *The State, Technology and Peasant Differentiation in Zambia: A Case Study of the Southern Province, 1930-1986*. Lusaka: Historical Association of Zambia.
- Colson, E. 1958. *Marriage & the Family among the Plateau Tonga of Northern Rhodesia*. Manchester: Manchester University Press.
- Colson, E. and T. Scudder. 1988. *For Prayer and Profit: The Ritual, Economic, and Social Importance of Beer in Gwembe District, Zambia, 1950-1982*. Stanford: Stanford University Press.
- Dennis, C. 1991. Constructing a 'Career' under Conditions of Economic Crisis and Structural Adjustment: The Survival Strategies of Nigerian Women. In H. Afshar ed., *Women, Development and Survival in the Third World*. New York: Longman, pp. 88-106.
- Geisler, G. 1992. Who is Losing Out? Structural Adjustment, Gender, and the Agricultural Sector in Zambia, *The Journal of Modern African Studies* 30(1): 113-139.
- Harris, C. 2006. Doing Development with Men: Some Reflections on a Case Study from Mali, *IDS Northern Rhodesia Journal* 2: 42-52.
- Kyomuhendo, G. B. 2009. The Mobile Payphone Business: A Vehicle for Rural Women's Empowerment in Uganda. In I. Buskens and A. Webb eds., *African Women and ICTs: Investigating Technology, Gender and Empowerment*. London: Zed Books, pp. 154-165.
- Pottier, J. 1994. Poor Men, Intra-household Bargaining and the Politics of Household Food Security.

- In I. Yngström, P. Jeffery, K. King and C. Toulmin eds., *Gender and Environment in Africa: Perspectives on the Politics of Environmental Sustainability*. Edinburgh: Centre of African Studies, University of Edinburgh, pp. 156-174.
- Vaa, M. 1991. Work, Livelihood and Family Responsibilities in Urban Poverty. In K. A. Stølen and M. Vaa eds., *Gender and Change in Developing Countries*. Oslo: Norwegian University Press, pp. 121-146.
- von Bülow, D. 1992. Bigger than Men? Gender Relations and their Changing Meaning in Kipsigis Society, Kenya, *Africa* 62(4): 523-546.
- Whitehead, A. 1990. Food Crisis and Gender Conflict in the African Countryside. In H. Bernstein, B. Crow, M. Mackintosh and C. Martine eds., *The Food Question: Profits Versus People?* London: Earthscan Publications Ltd, pp. 54-68.
- 児玉谷史朗. 1993. 「ザンビアにおける商業的農業の発展」 児玉谷史朗編『アフリカにおける商業的農業の発展』アジア経済研究所, pp. 63-124.

＜第 2 部＞ 研究集会報告

研究集会の概要

研究集会は、先に述べた趣旨により、メンバー3名が調査研究をおこなっているザンビアとラオスの学術機関で主催した。

ザンビアにおける研究集会は、2013年9月12日にザンビア大学の経済社会研究所でおこなった。首都ルサカに位置する同大学は、ザンビア国内にある三つの公立大学のうちの一つである。ザンビアが独立した1964年の翌年に国内で最初に設立された同大学は、現在9つの学部をもつザンビア最大の総合大学である。そして同大学の経済社会研究所は、英国の実用人類学の拠点として1938年に設立されたローズ・リヴィングストン研究所を前身としていることで知られる。ザンビア国内外の研究者の研究活動拠点として、学術交流が盛んにおこなわれている機関である。

経済社会研究所の研修センターの会議室を借りて開催した本研究集会では、事前に参加打診や広報に努めた結果、コメンテーター及び討論者として、アドバイザーを務めてくださった **Richard ZULU** 研究員のほかに、同研究所の教授・研究員・他所員9名、ザンビア大学人文社会学部の教員1名、ザンビア大学に近接するムナリ女子高等学校の教員3名、計14名の参加を得ることができた。

集会プログラムについて、各発表の後に設けた質問とコメントの時間には、発表者と参加者のあいだで活発な議論が交わされた。例えば、福島の記事については、親族間での物の交換に関してラオスとザンビアの文化的相違が議論的となった。原の発表では、調査対象である諸民族の食糧確保の問題に関し、生業の歴史や民族性などと絡めて意見交換がなされた。成澤の発表については、調査対象民族の性別役割分業の歴史的背景に関する再考の必要性などが指摘された。本研究集会は、社会学、人類学、開発学、言語学といった多様な専門分野で現地に精通した研究者の方々の参加を得られたことで、彼らと我々日本人研究者とのザンビアのフィールドを読み解く視点の相違から、双方に新たな発見のある有意義な学術交流となった。

ラオスにおける研究集会は、2013年9月25日にラオス国立大学の社会科学部で開催した。首都ビエンチャンに位置する同大学は、ラオスの最高学府であり、建学理念の一つに多民族国家の芸術・文化・伝統の保護と拡大を掲げているのが特徴で、世界に通用する人材の育成を基本理念にしている。

社会科学部の会議室を借りて開催した本研究集会には、アドバイザーを務めてくださった **Oudone VONGSOMMY** 講師のほかに、同学部の **Kabmanivanh PHOUXAY** 准教授を含む11名の教員と大学院生が、コメンテーターや討論者として参加した。その他、ラオスで調査研究をしている一橋大学大学院博士課程の難波美芸氏と京都大学大学院博士課程の辻田香織氏も討論者として参加した。

準備の段階では、多くのラオス人研究者にとって馴染みのないザンビアについて、発表内容を参加者にいかに分かりやすく伝えられるかが主な課題として認識され、そのための工夫が重ねられた。当日、予定していた国立社会科学研究所所属の研究者の参加を得られなかったことは残念だった。しかしラオス国立大学の若手を中心とした研究者が、熱心に発表に聞き入り討議に参加してくれたことで、将来にもつながる学術交流となった。

討論では色々な意見が聞かれた。例えば、福島の記事に対しては、研究調査の手法に関する質問がフィールドワークに関心をもつ学生から多く出された。原の発表では、トウモロコシやキャッサバを主食とするザンビアの作物利用に関する質問を多く受け、ザンビアとラオスにおける生業の相違につ

いて議論が交わされた。成澤の発表では、文化人類学の専門用語に関する質問が出たほか、主にザンビアとラオスの家庭内における性別役割分業の相違に関して活発な議論がなされた。研究集会の議事進行を務めた Kabmanivanh 准教授は、こうした学术交流の機会を今後も続けていきたいと挨拶して討議を締めくくった。

両研究集会の開催により、自分たちの研究の位置づけが再確認でき、また国際的な人脈をつくることもできて有意義であった。両集会でいただいたコメントを、今後の研究活動に生かしていきたい。



ザンビア大学で開催した研究集会



研究集会の準備について打ち合わせ



集会に参加してくれた ASAFAS 卒業生の Sande 氏宅にて



ザンビアでもラオスでも移動には交渉が付きもの



研究集会（於ラオス国立大学）の参加者



ラオス国立大学で開催した研究集会

研究集会のプログラム

集会名：

Livelihood, Social Ties, and Inter-personal Relationships in Agricultural Communities:
The Social Dynamics in Southeast Asia and Southern Africa

1. ザンビア集会

開催日：2013年9月12日（木）

開催場所（共催機関）：

Institute of Economic and Social Research (INESOR), University of Zambia

（ザンビア大学経済社会研究所、ザンビア共和国ルサカ市）

プログラム：

Opening and Welcoming Addresses

14:00-14:10 Mr. Richard Zulu

14:10-14:20 Mr. Naoki Fukushima

Introduction of the Study and Objectives of the Workshop

14:20-14:30 Dr. Noriko Narisawa

Presentation of the Research Outcomes

14:30-14:50 Topic 1: Changing Processes of Everyday Life in Rural Northern Laos

(Mr. Naoki Fukushima)

14:50-15:10 Topic 2: Livelihood Strategy in Multi-ethnic Agricultural Community, Northwestern Zambia: Focus on Food Exchange on Off-crop Season (Mr. Masaya Hara)

15:10-15:30 Topic 3: Women's Agency for their Economic and Social Development: A Case Study of the Burgeoning Ceremony for Developing Personal Friendships in Southern Zambia (Dr. Noriko Narisawa)

～ Tea Break (15min.) ～

Comments from Zambian Scholars and Discussion

15:45-16:50 (Moderator: Mr. Richard Zulu)

Closing Remarks

16:50-17:00 Mr. Naoki Fukushima

2. ラオス集会

開催日：2013 年 9 月 25 日（水）

開催場所（共催機関）：

Faculty of Social Sciences, National University of Laos

（ラオス国立大学社会科学部、ラオス人民民主共和国ビエンチャン市）

プログラム：

Opening and Welcoming Addresses

13:30-13:40 Mr. Oudone Vongsommy

13:40-13:50 Mr. Masaya Hara

Introduction of the Study and Objectives of Workshop

13:50-14:00 Dr. Noriko Narisawa

Presentation of the Research Outcomes

14:00-14:20 Topic 1: Changing Processes of Everyday Life in Rural Northern Laos

(Mr. Naoki Fukushima)

14:20-14:40 Topic 2: Livelihood Strategy in Multi-ethnic Agricultural Community, Northwestern Zambia: Focus on Food Exchange on Off-crop Season (Mr. Masaya Hara)

14:40-15:00 Topic 3: Women's Agency for their Economic and Social Development: A Case Study of the Burgeoning Ceremony for Developing Personal Friendships in Southern Zambia (Dr. Noriko Narisawa)

～ Tea Break (15min.) ～

Comments from Laotian Scholars and Discussion

15:15-16:20 (Moderator: Mr. Oudone Vongsommy)

Closing Remarks

16:20-16:30 Mr. Masaya Hara

ラオス北部農村における生活の変容過程

福島 直樹

【要旨】

従来、主に国連や途上国政府は、人間開発という考え方により、生産性の向上や一人当たり所得、また教育や医療へのアクセスのし易さから国民の生活水準を測ってきた。しかし地球規模の環境問題の議論の進展から、開発や発展の持続性を考慮する必要が指摘されるようになった。生存基盤研究では、生存圏という新たな分析枠組みを用いて、生産性に偏重した従来の価値観からの脱却を目指している〔杉原ほか 2012〕。

そこで本発表では、生産性や所得を向上させるための研究ではなく、生活を持続させるための基礎研究として、ラオス農村における生活用具の不足の補充を事例に農民の生存基盤の所在を検討する。

はじめに研究の背景と目的、方法について述べ、調査地の概況をまとめた。移住は世帯単位で行われていた。2004 年以降約 10 年間で世帯数が 3 倍に増加していた。集落人口の増加は社会増と自然増によるもので、両者がほぼ等しい割合でみられた。集落全体でみるとコメの収支状況では多くの余剰米があったが、世帯ごとにみるとコメが不足する世帯もあった。モン語の識字者が 24 人いたが 40 歳代以上にモン語の読み書きができる者がいなかった。

世帯特性に基づいて世帯ごとの生活用具の保有の特徴を考察した。生活用具は集落全体で 137 品目、2,488 点あり、最多保有世帯が 1 世帯で 65 品目 154 点、最少保有世帯が 22 品目 37 点だった。生活用具を用途別に 5 つに分類（食・住・健康・生業・社会娯楽）して世帯間の格差を調べた。

生活用具が不足する際に借用品の授受がどのように行われているかを調べるた。その結果、血縁関係のない世帯間の貸し借りが極めて稀なことや、集落共有の生活用具が存在することが分かった。また、精米機、小型水力発電機、テレビ等で複数世帯が共同で利用する状況がみられた。生活用具の種類によって、あるいは血縁の遠近によって、占有からオープンアクセスまで所有概念に幅があると考えられる。

結論として、調査集落における焼畑民が生活を維持するために必要なものは、不足が生じた際に生活用具を借りてこられるような人的ネットワークを維持することにある。生活用具の場合では、その人的ネットワークとして、基本的に三親等以内の血縁を利用していることを明らかにした。

Changing Processes of Everyday Life in Rural Northern Laos

Naoki Fukushima

Abstract

The Human development research in general measures the quality of life according to per capita income, improvement of productivity, education, and access to medicine. It is obvious, however, that resource use and the environment have to be studied in order to capture the true conditions of a people. This study represents a necessary part of a new analytical framework that is underway. Sustainability research positions the human being as part of the geosphere. Moreover, this form of study analyzes the material and mental conditions required for individuals and communities to support themselves.

This study focuses on Laos, the worst of the three countries with food shortages in Asia, to examine what sustains the people. The study centers on the people who utilize a slash--and--burn method where they reside in the northern mountainous region of Laos (known as the poorest area).

In the study area, Hmong village migration took place in household units and, not in village units, at any stage. There was a surplus of rice in the whole village, but there were also families with a rice shortage. Regarding the holdings of life tool, there was a gap of about three times the amount between the largest and smallest holder. For this research, I categorized the life tool according to each of the basic needs, including clothing, food, housing, health, livelihood, and social entertainment.

In the research on borrowing products, I discovered that there was no lending-borrowing between unrelated households. Further, it was discovered that there were not only households but also villages that functioned in this manner because the entire village was related. Their means of supporting each other may vary from open access to occupancy. The open access tool is a method utilized with items such as a rice milling machine, a small hydroelectric generator, and a television that could be used by anyone in the village. The perspective of kin changes the concept of ownership. For those with family ties, the “owner” is the entire family.

The survival foundation for the people in the research village is not the holding of useful tools but relying on a kinship of consanguinity.

ザンビア北西部の多民族農村における生計戦略—端境期における食料の確保に着目して

原 将也

【要旨】

ザンビアでは、独立以降の市場経済化にともなって人びとの流動性が高まり、農村から都市への移動が増加した。しかし構造調整プログラムが本格化すると、都市の生活環境は悪化し、農村へと帰村する都市居住者がみられた。ザンビアの農村は、従来から親族やクラン、民族といった系譜でたどれる集団を基本として形成されてきた。しかし人びとの流動性の高まりは、農村における民族構成にも影響を及ぼし、多民族構成の農村もみられるようになってきた。

本研究ではザンビア北西部の多民族農村において、居住する人びとの流動的な動きをとらえ、農村内で形成されている社会関係について検討していく。具体的には、食料の確保という観点から、人びとが多民族農村においてどのようなつながりをたよって食料を入手し、生活を維持しているのか検討していく。

調査地の S 地区はカオンデという民族の領域であるが、ルンダやルバレ、チョークウェ、ルチャジという 5 民族が居住している。カオンデ以外の人びとは移住者であり、民族間の近接性の高さやカオンデ社会が分節的であることから、農村や都市から多くの人びとが移住してきた。とくに親族や民族といった系譜でたどれるつながりだけをきっかけにして移住してきたわけではなく、個人的なつながりもたよって移住してきていた。

調査地で営まれているおもな生業は農耕であり、トウモロコシとモロコシ、キャッサバの 3 種の主食作物が栽培されている。栽培する主食作物の組み合わせは、世帯によって異なっており、モロコシを栽培する世帯はカオンデの世帯のみであった。一方でカオンデ以外の世帯では、トウモロコシとキャッサバを組み合わせで栽培していることが多かった。

カオンデの人びとのようにトウモロコシやモロコシを中心に栽培していると、雨季には端境期におちいってしまう。端境期に主食を確保することは課題であり、人びとはキャッサバを食べることで、主食を確保していた。キャッサバを栽培する人びとの多くは、カオンデ以外の人びとであり、キャッサバのイモはカオンデの人びとにも提供されていた。このようにキャッサバのやり取りは民族に関係なく、系譜でたどれるようなつながりだけではなく、個人的に形成されたつながりもたよっておこなわれていた。このように S 地区の人びとは、キャッサバのやりとりをとおして民族間の関係を形成しており、個人的なつながりを保持しながら、日常生活を営んでいる。

Livelihood Strategy in the Multi-ethnic Agricultural Community, Northwestern Zambia:

Focus on Food Exchange on Off-crop Season

Masaya Hara

Abstract

Migration from rural to urban areas has been increasing in Zambia due to the penetration of the market-oriented economy. After the structural adjustment program (SAP) in the 1990s, the unemployment rate increased, and the urban environment deteriorated. Some urban residents began to return to their villages and founded new villages based on kinship, clanship, or ethnic relationships. Due to the fluidity of urban-rural migratory trends as a function of changes in national policies, several multi-ethnic villages exist in Zambia. This presentation aims to understand the fluid migration of people living in a rural village in Northwestern Zambia and to examine the social ties in this multi-ethnic agricultural community. In this presentation, I will focus on the food exchanges in a multi-ethnic society to clarify how these ethnic groups coexist to maintain their livelihoods.

The research village, S ward is located in the ethnic territory of Kaonde. Five ethnic groups, Kaonde, Lunda, Luvale, Chokwe, and Luchazi people, live in S ward. Non-Kaonde people are immigrants from outside communities, including both rural villages and urban cities, who chose S ward because of linguistic and ethnic proximity. Kaonde chiefdom system is segmented, and it makes room for immigrants from other areas. The proximity of ethnic groups was formed by their historical backgrounds. Immigrants from rural villages use the kinship ties of their relatives to choose a village in which to settle, whereas immigrants from urban cities utilize personal relationships, such as friendships, or business relationships to make this decision.

The main subsistence activity of all residents is agriculture, and cassava, sorghum, and maize are cultivated as staple crops. The combination of staple crops cultivated differs across households. Kaonde households tend to cultivate sorghum, and most non-Kaonde households cultivate maize and cassava. Kaonde people experience hunger during the rainy season because this is the off-season for maize and sorghum and they do not cultivate cassava, which can serve as the staple food on a year-round basis. Indeed, most residents consume cassava as the staple food during the hungry season. Lunda, Luvale, and Chokwe people sell cassava to the Kaonde people, who suffer from food shortages regardless of ethnic identity. They frequently exchange cassava with other ethnic groups, a practice that both reflects personal relationships and establishes new inter-ethnic relationships. This ability to coexist in a multi-ethnic society is important for the livelihood and everyday life of all community members.

女性のエージェンシーをめぐって—ザンビア南部における個人的友人関係を育む祝祭の展開を事例に

成澤 徳子

【要旨】

本研究は、ザンビア南部に暮らす農耕民トンガの女性たちによる、友人同士で贈り物を贈答し合い絆を深める実践である、デロングウェと呼ばれる祝祭を対象としている。

アフリカ諸国の農村部では、経済自由化以降に小農世帯における生計活動が多様化するなかで、これまで家族のための自給用作物生産の主要な担い手とされてきた女性の生業に、多様な非農業活動を展開し現金を稼ぐといった変化がみられている。こうした変化について、ジェンダーに関する先行研究では、女性個人にとって再生産労働に関わる義務の延長と労働の過重化がもたらされたにすぎず、女性の基本的役割は今日に至っても何ら揺るぎないことや、急激な役割変化が女性への家庭内暴力を増加させるなど、世帯内のジェンダー関係が緊張度を増してきていることが問題として指摘されている。

これらの研究は、マクロな構造レベルで女性が周縁化されていくプロセスを明らかにすることに貢献してきた。一方で、ジェンダー間の不平等や不均衡な権力関係を強調するあまり、女性たち自身が自らのおかれた立場をどのように理解し、女性たちを取り巻く関係性のなかでいかに自らの暮らしや生き方を探求しようとしているのかという、女性のエージェンシーにかかわる問題が看過されてきたといえる。

トンガの女性たちは、ジェンダーに基づく様々な社会経済的制約のなかで、既存の社会関係が反映されるローカルな地酒飲み場や儀礼の場での各種生産物・加工品販売をおこない、定期市のない社会において自分たちの「いちば」を創出し現金稼得を実現してきた。こうして得た現金は、家族のための生産や再生産への支出だけに充てられるのではない。例えば、女性たちは稼いだ現金を利用して、女性同士の友情の絆を育むための祝祭であるデロングウェを創出し、自らの生活の保障や潤いを他者との関係性のなかでつくりだしている。

デロングウェは、トンガ語で友情という意の名詞である。その名の付いた祝祭は、任意にペアを組んだ女性2人が一方の家に定期的に集まり、食事による歓待と贈り物の贈与交換を繰り返すことで、個人的な知人関係をより強固な友人関係へと発展させるためのものである。またこの祝祭には、主催する当人たちの関係の深化だけでなく、主催者の協力者や、主催女性を祝福するために集まる大勢の聴衆など、主催女性が帰属する集団の他の女性が新たな社会関係をつくりだすきっかけを提供する役割もある。

トンガ社会では、在来の互助労働や頼母子講といった女性組織が存在しない。家庭内労働や葬式などにおける日常的な相互扶助関係である「母であること (motherhood)」に基づく同性間のつながりが唯一存在するものの、この紐帯は非常に弱い。本報告では、デロングウェによる友人関係の形成を事例に、トンガ女性たちが社会的関係性のなかで発揮するエージェンシーの可能性について検討する。

Women's Agency for their Economic and Social Development: A Case Study of the Burgeoning Ceremony for Developing Personal Friendships in Southern Zambia

Noriko Narisawa

Abstract

This study focuses on the burgeoning ceremony called *Cilongwe*, which women in the Tonga society of southern Zambia use to develop personal friendships.

In the last two decades, studies have noted that African peasant women who had previously engaged in subsistence agriculture and domestic work are now generally engaging in and expanding their non-farming activities and earning cash. While men tend to spend their money on luxuries and capital-intensive commodities to secure their own status in their communities, women's earnings are very likely to flow back into the household. In other words, a rapid change in indigenous gender relations could lead to social conflict due to complaints from men who worry about losing their vested interests and position of power.

In the Tonga society, where men have historically reigned as earners, women have created 'local markets' by attending social activities in the community to sell various goods, making amusing, joyous, and celebratory spaces into economic ones. Simultaneously, they have created the *Cilongwe* ceremony and spend their earnings not only on food and materials for their family but also on maintaining and constructing social networks, buying gifts and foods or paying for handsel for the ceremony.

Cilongwe means friendship in the Tonga language. A woman who is willing to have a *Cilongwe* ceremony pairs up with a female friend, gives her a variety of goods for daily use, and receives much appreciation in the form of a special meal from her at the ceremony. These two women hold a ceremony about once a year and take turns giving gifts annually. Each time, they have to give better gifts than the last ones. Once it becomes difficult to enhance the value of the gifts, they stop holding the ceremony and leave their partnership. The ceremony provides a good opportunity for women to socialize, not only for those who are the hosts but also for the many others who gather to bless the friendship between the hosts.

This presentation examines how women have developed *Cilongwe* in the Tonga society, where the mutual cooperation of women has been limited by factors associated with age and motherhood. The emphasis in this study is on agency of the Tonga women who have expanded their socio-economic activities by utilizing existing social norms and morals in a harmonized development process.

おわりに

本研究集会は、京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センターによる「国際研究発信力強化プログラム」から支援を受けて実現した。研究集会の開催から成果報告書の完成に至るまでには、多くの方々の協力を得た。ザンビア大学経済社会研究所とラオス国立大学社会科学部の教職員の方々、とりわけ **Richard Zulu** 先生と **Oudone Vongsommy** 先生には、現地アドバイザーとして、集会の会場準備や広報に至るまでご尽力いただいた。また集会当日、活発な議論を盛り上げてくださったすべての参加者の方々に感謝したい。

準備段階から報告書の完成まで、長期にわたって私たちのアドバイザーを務めてくださったのは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科キャリア・ディベロップメント室の近藤史先生である。他にも、本プログラムを担当されている先生方、とりわけ臨地教育支援センターの鈴木遥さん、山本佳奈さん、中村香子さんには、最後まで辛抱強くサポートしていただいた。私たちの取り組みに協力してくださったすべての方々に深く感謝申し上げる。

福島は生活用具、原は食物、成澤は贈答品のやりとりに着目し、調査村の人びとの「つながり」の意味を、彼らの日常生活の文脈において記述し分析してきた。調査地域と専門分野の異なるこの3人が、それぞれ違った視点から農民の生業と社会的ネットワークに関する研究アイデアを持寄り、研究集会のタイトルを決めるところから終わりのない議論がはじまった。私たちは本研究集会の開催を通して、アジア・アフリカ研究者との学術交流のおもしろさに改めて触れた。人びとが紡ぎ続ける「つながり」の民族誌を比較研究する地域横断的な学際チームとして、これからも研究交流を続けていきたい。

2014年3月

福島直樹

原 将也

成澤徳子

2013 年度 国際研究発信力強化プログラム リサーチ C&M 報告書
2013 Report of Research Collaboration & Management Support Course
for International Research Output Training

ラオス・ザンビア農村における生業と社会的ネットワークに関する研究
ー農作物と生活用品のやりとりを中心にー

発行日 : 2014 年 3 月 20 日

発行 : 京都大学学際融合教育研究推進センター 総合地域研究ユニット
臨地教育支援センター

〒 606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 総合研究二号館別館

電話 : 075-753-9636 Fax: 075-753-9655

E-mail: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

印刷 : 中西印刷
